
悪がままに ~ 2 3 区編 ~

柳秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪がままに ～23区編～

【Nコード】

N3860Y

【作者名】

柳秋

【あらすじ】

舞台は東京23区。今編の主人公的存在である“皆殺”の『翔』を中心とした、能力者達の複雑に絡み合う人間模様を描いた物語。そう物語なんですね、くれぐれも小説ではありませんのでご注意ください！！

くプロローグく

西の空が赤く染まり、鴉の鳴き声が聞こえている。

学生服を着こなし付き合い始めて半年を迎えた幼い2人は、いつものように小さな公園のベンチに座っていた。学校から程近いその公園には鮮やかな青紫色のアジサイが咲き乱れ、奥には無人のブランコとジャングルジムが寂しそうに夕日に照らされている。そんな景色を眺めながら、学校での出来事や友人の話など他愛も無い会話をしていると、不意に真剣な面持ちで優香は翔を見つめた。

「翔、大好きよ……」

あまりに唐突な出来事に翔は驚いた表情をしているが、その後に見せた優しい笑顔が何よりも好きだった。

「俺もだよ」

優香の目を見つめ真剣に答えた。顔は強張り引きつつている。苦手な笑顔を作ろうとしたらしい。そんな精一杯の姿を見た優香はそつとキスをした。そして、ベンチの背に寄りかかりながら薄暗い空を見上げている。翔はキスの余韻に浸りながら、優香を見つめていた。

「大人になった翔ってどんなだろ？」

「変わらない気が（んっ、これは……）」

何かが過ぎつたのであろうか、翔は不思議な感覚に襲われていた。

「そうだよね。どんな事があっても変わらないでね……」

優香は足元に視線を落とし、寂しげな表情で話し続けている。翔は嫌な予感が脳裏を過ぎり、話を止めようと必死になった。

「ちょ、ちよつと待ってくれ!!」

「今日はもう帰るね……」

目の前にいるはずの優香が透けて見える。翔は何度も瞬きを繰り返し信じられない表情で見ていると、優香はゆっくりとベンチから立ち上がり無言のまま遠ざかっていく。

「くっ、ま、待てって……行くな!!」

抱きついてでも止めようと試みるが、思うように体が動かない。遠ざかっていく背中から、聞こえるはずの無い声が心に響いてきた。

「もう……自分の……人生を……歩んで……」

突如、辺り一面が暗闇に包まれ優香の姿が吸い込まれていく様に見えた。翔は無我夢中になってもがき続けるが、何も変わらない。

「うおお……（我に眠りし……）くうっそお……動けっ!!」

ゆっくりと遠ざかっていく背中を、ただ見つめる事しか出来なかった。

「……さようなら」

「うわぁっ!!」

布団を抱きかかえたまま上半身だけを起こしていた。日の出前な

のか、静けさの漂う暗い部屋の中で一人呆然としている。ふと気がつくと、大粒の涙が髪を濡らしていた。

第1話 噂 ～Bar Change～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第1話 噂 〱 Bar Change

——練馬区：Bar Change——

儚い運命、散り際が最も美しいと評される桜の花びらがヒラヒラとヒラヒラと途絶える事無く大地に無常を知らせている。共に流れゆく優しい風が、心の何処かに潜んでいる哀しみを連れ去ってゆくようだ。

そんな季節、とある店に舞い込んできた知らせから、この物語は始まりを告げる。

人通りが激しい大通りから一步外れた雑居ビルの1階に、昌也は店を構えていた。態と覗けるようにしたガラス張りの入口からは、左手に8席のカウンター右手には4人掛けのテーブルが3つ置かれているのが見える。決して飲食店を営むには最適の場所とは言えない立地であるが、地道な営業活動と人当たりの良さで店は連日の賑わいを見せていた。

昌也は、面倒見が良く知識と優しさを兼ね備えた人物で、一時は他校にファンクラブができた事がある程、異性から人気があった。小学校3年生の時に翔が転校してきた頃からの大親友で、良き理解者である。そんな昌也も28歳を迎えていた。

日が沈み、常連客の姿がちらほらと見え始めている。昌也はカウンター越しに話をしていると、ポケットから携帯電話に呼ばれた。

「はい……」

キッチンに向かいながら何度も応答するが、相手は沈黙を続けて

いるだけだった。不審に思い誰からか確認しようと、携帯画面に目を向けようとした瞬間だった。

「誰だっ！！」

相手の言葉に一つ間を置き目を瞑った。聞き慣れた懐かしい声に、思わず頬が緩んでいる。

「お前から掛けてきて誰だとは何だ！！……元気にしてんのか？」
「おーよ、久しぶりだな。今、羽田に着いた……」

電話の主は、親友の翔からだった。

「……はい！？ お前帰って来たのか？」

「おう、そろそろ頃合かと思ってよ……」

「……バカ、長すぎだよ。10年だぞ10年」

「まあまああ、そーゆーなって。ところでお前は……今何してんだ？」

「2年前に開業したBARを……」

「うおっ……後で行くからよ。じゃあな……」

「お、おい……切りやがった。店の場所知らないくせに……」

相変わらずの身勝手さに目を細めながら参った表情を浮かべている。だが、久しぶりの再会に心は躍っていた。

——数時間後。

来店を告げる鈴の音が鳴り響き、いかにも悪そうな面構えをした4人組の男と1人の女が姿を現した。おそらく20歳を超えて間もない年頃だろうか、昌也は何気ない表情で見っていた。

「いらっしやいませ!!」

女性店員の径子は、その5人組に笑顔を絶やさずカウンター席に案内をしている。男達は周囲を威嚇する様に歩いているせい、常連客は一斉に目を逸らしていた。彼らは席に着くや否や、今日の出来事であるう話を始めた。

「翔さん、やっぱ強いっすねー」

一番端に座っている男が口火を切った。昌也はカウンター越しにグラスを磨きながら、聞き耳を立てている。

「あいつらの逃げっぷりは最高でしたよ」

「さすが、東京【五虎将】っすよね」

翔と呼ばれている男を持ち上げながら会話が進んでいく。煙草に火を点け、男も満更でもない表情をしていた。女は見惚れた様子で見つめている。おそらく、その翔と呼ばれている男の彼女なのだろう。

「でも、大丈夫なんすかね。やつら【侠狼会】だって言っていましたけど……」

「その名前を出せば俺たちがびびると思って言っただろ……それより、持って来たんだろっな？」

「あっ、はい。どうも、ありがとうございました!!」

手渡された包みは明らかに大金だと見て取れた。男は手馴れた手つきで中身を確認し、不敵に微笑んでいる。

「まっ、何かあったら連絡くれよ」

「はい、よろしくお願いします!!」

3人は翔と呼ばれている男を囲むように席を離れ、頭を下げてお礼を言っている。それが終わるや否や、注文もせずにそそくさと帰ってしまった。その様子を見ていた径子や常連客は、啞然としている。

男は優越感からなのか女を意識してなのか、格好つけて珍しい名前のカクテルを注文した。しかし、それはノンアルコールカクテルだ。知ってて言っているのか、ただ知らないだけなのか。聞き間違いかと不安に駆られたバーテンダーが確認をしている。そんなやり取りを見ていた常連客がクスクスと笑い始めた。カウンターを挟んでの押し問答が、今にも始まりそうな雰囲気だった。

その様子を隣で見ている昌也は、話題を変えようと男に話しかけた。

「失礼ですが、お客さんってあの有名な『翔』さんですか？」

男は不機嫌な顔をしたまま、昌也に振り向いた。

「……だとしたら？」

「いやぁ～あのですね、そろそろ帰られた方が……」
「な、何だと!？」

男は立ち上がり、物凄い形相で昌也を睨みつけた。

「あついやつ、そろそろ……」

相手の反応に慌てた昌也は、理由を伝えてなだめようとした時だった。濁った鈴の音が強く鳴り響いた。

第2話 噂　くつまんねーの

——大田区：羽田空港——

——時は少し遡る。

羽田空港に到着した翔。

“皆殺”の異名を持ち、我尽で自分勝手、ついでに気分屋の野蛮人。そんな性格と数々の過去の悪行から完全に悪党としての噂が付きまとう男だが、その一方で立場の弱い者を保護するという奇特的な一面を持ち合わせている。しかしながら総評すると、悪名が先に立つような人物である。目を合わせた相手が一瞬たじろぐ程の目力を除けば、至って普通の外見であり、淡い水色のジーンパンをはき全体的にラフな格好を好む。

翔は、第2ターミナルのソファアに腰掛けて電話をしていた。

「……バカ、長すぎだよ。10年だぞ10年」

……ピーコン……ピーコン。耳元で何かが鳴っている。

「まあまあ、そーゆーなって。ところでお前は……今何してんだ？」

……ピーコン……ピーコン。その音は鳴り止まない。

「2年前に開業したBARを……」

「（んっ）うおっ……後で行くからよ。じゃあな……」

「お、おい……」

ピー……。――

「切れた……」

充電が無くなったようだ。携帯片手に悲痛にも似た雄叫びを放つ。

混雑しているターミナル、周囲の人々は係わり合いを恐れ翔の居場所を避けて歩きはじめた。

「まっいいや……」

気を取り直して立ち上がった。これといった手荷物は無く、手ぶらのまま羽田空港国内線ターミナル駅へと歩きだした。

ターミナルの広大な景色を眺めながらしばらく歩いていると、政治家と思われる人物が記者団に囲まれている。好奇心旺盛な性格からか、テレビカメラに映ろうとわくわくしながら向かった。

「カメラだけかよ……つまんねーの」

あからさまに不機嫌な表情を浮かべている。テレビカメラが1台も無い事が気に入らなかったようだ。興味が無くなり駅に向かって歩き出した。

「……首相の参拝に対して……ありますか？」

無言のまま立ち去ろうとする政治家に、記者団から次々と質問が浴びせられている。必死で守る秘書の姿が痛ましい。

翔は品川駅に到着していた。山手線へ乗り換える為、構内を歩く。各方面への中継地点として役割を担うこの駅は、時間帯を問わず大勢の人々が行き交う。真っ直ぐに歩く事などままならない状態である。

人の波にのまれ歩いていると、突然、目の前が開けた。視覚障害者の男性が白杖を突いて歩いて来ていたからだ。翔も道を譲りすれ違う。

「すいません、ありがとうございます」

「んっ？」

男性の言葉に、一瞬だが妙な感覚に襲われた。振り返り、遠ざかっていく背中を見ていた。人の波は、立ち尽くす翔を避けるように流れている。男性の姿が視界から消え、山手線へ向かって歩き出し

た。

山手線の外回り、渋谷・池袋方面に乗り込んだ。車内はそれほど混雑していない。

「とりあえず池袋で乗り換えるか……」

路線の案内図を見上げている。すると扉を開ける大きな音が聞こえ振り向くと、隣の車両から大工らしき服装をした、大柄のおっさんが入ってきた。

「うつひゃつひゃ。ういゝ……」

誰の目から見てもベロベロに酔っ払っている様子が窺えた。周りの乗客は見ても見ぬふりをしている。何かやらかすんじゃないのかと期待の目線を送っている翔の居場所に差し掛かると、目が合った。しかし、おっさんは電車の揺れに流されるまま、フラフラと次の車両へ行ってしまった。

「ちっ……つまんねーの」

何事も無かった事が気に入らなかったのか、不貞腐れたまま席に座った。

電車は目黒駅に到着している。翔は中刷り広告などを眺め発車するのを待っていた。ベルが鳴り止み閉まるドアと同時に、コギヤル2人が飛び込んできた。

「ちよつとお！！今のマジ際どくない？」

「もう超ーうける！！挟まれるかと思っただじゃん」

ギリギリの動きに興奮したのか勝手に盛り上がっている。そのテンションの高さは異常だ。静寂に包まれている車内で迷惑そうな表情を浮かべている乗客。

「……（ちっ、挟まれればおもしろかったのに）」

そんな目線でじつと見ている翔に気づいたのか、2人は目の前の席に座った。ミニスカートを気にする様子もなく、足を開き座っている。当然、下着が丸見えだ。

「……（じつと見るのも変だし、見て見ぬふりも嫌やな）」
目が泳いでいる。2人はチラチラと翔を意識して笑い、ヒソヒソと話し始めた。

「……（うわっ、最悪!!）」
居ても立ってもいられず、隣の車両へと向かった。

第3話 噂　く修羅く

——練馬区：某所——

翔は地元に着した。街灯が光り輝き、想いでと共に懐かしい景色を眺めていた。

「さすがに10年も離れると、景色が結構……変わってねえ!!」

街の変化を覚悟していたのか、ホツとした表情を浮かべていた。感慨にふけりながら地元を見歩いている。

すると、母校の制服を着た不良達が屯していたので立ち止まった。彼等を見つめ中学時代の懐かしい想いでに浸っている。しばらく眺めていると、煙草を吸い始めたり、飲んだ空き缶を道路に投げ捨てたり、通行人に絡んだりやりたい放題に振舞い始めた。

「かあ……いつの時代もやる事は一緒だなあ」

呆れた顔で見ていると、通りすがりのお爺さんに不良達が絡み始めた。調子に乗った一人が杖を蹴飛ばし、倒れ込む姿を見て大はしやぎしている。

「ちっ、あのガキ共……」

不良達に向かって歩き出した。杖を拾いお爺さんを抱き起こす。

不良達はただ傍観していた。

「お爺ちゃん大丈夫？」

「これは、どうもすいませんねえ……」

お爺さんは杖を突き、ゆっくりと歩き出した。翔は不良達に背を向けたまま、その姿を見届けている。

「おい見るよ、正義のヒーローが現れたぞ……きゃー、助けてヒーロー……!!」

背後から小馬鹿にした野次や空き缶を投げつけられている。よほど気に入らなかったのか挑発を繰り返し、大騒ぎしていた。

「あれ！！もしかして翔かしら？」

通りすがりの女性は騒ぎに気づき集団を見ると、翔らしき姿を見つめ近づいて行った。

「見つけました……」

物陰から覗いている怪しい男も、騒ぎの渦中に翔の姿を発見し、何処かへ報告をしている。

終わる事の無い挑発を繰り返し大騒ぎしている不良達は、振り返った翔を見て言葉を失った。

「正義のヒーローの方がまだましだったかもな……」

殺気を放ち悪魔の形相で睨んでいる。不良達は蜘蛛の子を散らすように逃げ去って行った。

「……ったく。俺もあんなだったのかなあ」

「良く言うわよ。あんたに比べれば可愛いもんよ」

横から聞こえる女性の声に、驚いた表情で隣を見た。

「……弘美か？」

「生きてたんだねー。よかった……」

喜びのあまり人目も気にせず抱きついてきた。

「お、おい。離れろ……（皆が見てる、恥ずかしいだろ）」

大騒ぎしていたからか、翔の周りには軽い人だかりができていた。

「はい、商店街の入口付近です。……このまま尾行します」

再び怪しい男は現状報告を何処かへしている。

「あのねえ。みんな心配してたんだよ……」

「はいはい。それより、昌也の店を教えて（いい加減離れるよ）」

「もうっ……え〜とね、まー君のお店は……」

翔から離れ、昌也の店の場所を教えている。

「ありがと、じゃーな」

サバサバとお礼を言っ立去ろうとしている。

「ちょっと、まだ話が……」

「悪い、急いでんだ……また今度な」

手を振りながら逃げるように立ち去って行った。

翔は教えられた昌也の店へ向かわず、人通りの無い裏道へ進んだ。
人気の無い小さい広場に辿りつき、辺りを見回している。

「ふう、ここなら大丈夫だろ……誰だ？」

「……気づいていたんですね。流石です」

しばらくして薄暗い場所から怪しい男が姿を現した。明らかに暴力団関係者と思われる。

「ああ、お前か。……『重慶』は元気にしてるのか？」

「はい、とてもお元気ですよ」

男は微笑みながら答えるが、口は笑っていても目が笑っていない。

「……で、用件は？」

「証明して頂きたいんですね、彼らで……」

背後から見るからに手強そうな6人の猛者が姿を現した。翔は振り返り、予想外だったのか苦笑いしている。

「証明ねえ……（うげっ、全く気づかなかったー!!）」

「ご存知だとは思いますが、中継されておりますので……」

「いい加減その趣味やめたら……『重慶』聞こえてんだろ？」

「……では」

その声と同時に、襲い掛かってくる猛者達。瞬時に翔を取り囲み一斉攻撃を繰り出してきた。

「むっ……うお……ぐっ……ぐわぁ」

予想以上の強さに完全に後手後手になっている。そして、背後からの強烈な蹴りに包囲網の外へとふっ飛ばされた。倒れている翔を見下ろしながら不敵に笑っている猛者達。

「痛っ、こんなにやろう!」

「大丈夫ですか、そのままだと危険ですよ……」

その光景を穏やかに眺めている男は、含みのある言葉を投げかけた。翔は立ち上がりその男を見た。

「しょうがねえなあ、希望を叶えてやるよ。（【潜在：修羅】）うおお……（我に眠りし修羅よ、今……目覚めよ）」

「修羅」 殺戮の悪魔。魔界の頂点に君臨する絶対的支配神。万物を滅亡へと導く。

「能力」 黒いオーラが全身を覆い殺気を解き放つ。見た目に変化は伴わないが、怒りに比例して超人化し爆発的な強さを得る。その反面、強さに起伏が激しく、持久力に不安を抱える。

悪魔の形相に黒いオーラが全身を覆っている。解き放たれる殺気に、猛者達は圧倒され後ずさりしている。

「……いくぞ」

—— 2分後。

無残な姿をした猛者達が地面に転がっていた。

「で、目的は？ ……って、もう居ねーし」

男に問いかけるが、いつの間にか姿を消していた。

「ふう……あーあ、返り血を浴びすぎたぜ」

服に付いた大量の血を眺めている。ふと腕時計に目をやると23

時を回っていた。急いで昌也の店へと向かった。

第4話 噂く騙りの翔く

——練馬区：Bar Change——

翔は店の前に到着し、勢いよくドアを開けた。濁った鈴の音が強く鳴り響いた。

「ああー疲れた……昌也はいるかあー？」

大声で叫ぶ姿に、店内の視線が一斉に注がれた。常連客と従業員は唖然としている。血だらけ男が来店してきたのだから当たり前だ。そんな事は御構い無しに店内を見渡すと、カウンター越しに男に詰め寄られている昌也を発見した。

「……（昌也だと？）」

男は名前に反応したのか、静かに席に座り煙草に火を点けた。

「おおっ、こつちだこつち……（なんでコイツは血だらけなんだ？）」

カウンター内から手を振り声を掛けた昌也は、あからさまに嫌な顔をしている。径子は無言のまま翔を見ていた。

「あんにやろ……帰って早々に襲ってきやがって、何なんだ……」

昌也に歩み寄りながら、ぶつくさと独り言を口走っている。

「えっ、もしかして……【狭狼会】？」

「んっ？ 何で解ったんだ……」

「こちらさんが詳しく教えてくれるかもよ」

めつきり大人しくなった男に目を向けた。翔は何の事やら分からないまま、カウンターに座っている男に声を掛け顔を覗き込んだ。

「……誰だあ？」

「あー！！ お前こそ誰だ？」

「何だと！！……客らしいが、いいのか？」

いきなりの喧嘩腰に驚いている。そして、言い方が気に入らなかったのか苛々しながら昌也に尋ねた。

「【修羅】には絶対になるなよ!!」

「……（【修羅】!!）」

店の破壊を恐れた昌也は、目をギラつかせ念を押した。その言葉に反応したのか、男は驚愕した顔で目を見開いている。翔は再び覗き込んで睨みつけた瞬間だった。

「ちょ、ちよつと待ってくれ。もしかして本物……ですか？」

「本物だと!？」

眉をひそめ首を傾げている。

「あつはつはつはつ」

昌也は腹を抱えて大笑いしている。

「なあゝに笑ってんだよ？」

「すまんすまん、実際に会ったのは俺も初めてでよ……。お前が消息を絶つてから偽者があちらこちらで出没してるって……」

「偽者!? 消息を絶つ!？」

「ああ、お前が旅に出た事は誰にも言っていないからな。4年ぐらいしてからだったかな、死亡説が流れたのは……」

径子は無言のままそつと昌也を見つめた。

「（どおりで……）おいおい、勝手に人を殺すなよ……」

苦笑いをしている。男は無言のまま2人のやり取りを聞いていた。

「お前、『仁』には話したのか？」

「お前だけに決まってんだろ（何であいつに言わなきゃならんだ）」

「それじゃゝ偽者の出現もしようがないな」

「……そうなんですよ、昌也の兄貴!!」

「兄貴だあとゝ」

だんまりしていた男は意を決して話しに割り込んだ。

「大変申し訳御座いませんでした。私は三原台の修と言います」
申し訳なさそうに深々と頭を下げた。

「ほお、君が……で、修君は何で翔を騙ったのかな？」

「はい、あの……【皆殺伝説】に懂れておりまして……。翔さんの死亡説を聞いてから、少しでも近づきたいと……」

真剣な眼差しで翔を見ている。昌也もまた、無言のまま翔を見ていた。

「……その話はどうでもいいが、今すぐ三原台に帰った方がいいぞ。お前が手を出したのは【侠狼会】が囲っているチンピラ達なんだよ」
「あつ、はい。こんな形だったとはいえ、お会い出来て嬉しかったです……！」

修は報酬として受取った包みを残したまま、女を連れて店を飛び出して行った。

「お前を襲ってきたのは『重慶』の手の者だったのか？」

「うん……だが、三原台にはおそらく本隊が動いただろうな」

「三原台ねえ」

昔を想い出していた。

「おい！！ それより傍に居るその可愛い店員は誰なんだ？」

径子は可愛いと言われ驚いた表情をしている。

「おお、紹介が遅れたな。俺の彼女だ」

「なっ、何い……！」

驚きのあまり目を見開いた。

「あの、初めまして径子です」

おしとやかに微笑みながら挨拶をした。

「よ、よろしく……（羨ましい）」

引きつった表情で答えた。

23歳を迎えた径子は、昌也と付き合い始めて4年が経つ。幼い頃に両親を亡くし、高校卒業まで親戚の家にお世話になっていた。そんな境遇からなのか、礼儀正しくしつかりとした雰囲気が見て取れる。

「お前さあ、それより風呂貸してやるから入ってこいよ」

「……お、おお。さすがにこれじゃーお客来ないもんな」

家の鍵を受け取り店を後にした。

翔と修が居なくなった店内。常連客の慣れたいつもの空気が流れているが、どこかソワソワした雰囲気漂っていた。時刻も日をまたぎ、店内は少数の常連客が残っているだけだった。

昌也と径子はカウンター内で後片付けと明日の下準備を始めていた。

「まー君。翔さんって聞いてた噂と全然違うね」

「うーん、半分以上は当たってる気が……」

手を動かしながら苦笑いしている。

「でも、いい人そうだったよ」

「いい奴だよ。弱い立場の人には絶対に手を出さないし」

「え？ それって当たり前じゃ……」

呆れた顔で昌也を見た。

「あいつは当たり前って常識が無いんだよなあ」

「……噂の部分も本当にあるって事？」

昌也は頷きながら考えていた。

「上手く言えないんだけどさ、両足が不自由なんだろうな。杖を突かずに、なんとかその足で歩いている障害者の人って見た事ある？」

「うーん、両足を引きずるように歩いている人の事かな？」

「そうそう、俺達の中学にその障害を持った女の子がいてな……」

——15年前。

翔と昌也が、中学1年生の時である。
残暑も終わりを告げ、秋の到来を間近に控えた季節である。

昼休み、裏庭にあるいつものたまり場に翔の姿が見えない。昌也は教室に向かい話を聞くと、今日は欠席しているとの事だった。しようがなくなたまり場へ戻ろうと廊下を歩いていると、翔の姿を発見し駆け寄った。

「お前……また喧嘩したのか？」

「喧嘩じゃねえ、袋叩きにされた……体中が痛え」

翔は顔に数箇所の子あざと鼻血を出していた。

「どうせあの公園に行っただろ……先輩達にも近寄るなって言われただろ？」

「うるせえなあ……頭に響く」

当時、翔達の地域にある小さな公園は隣町の中学校に占領されていた。その生徒はほとんどが不良であり、3割近い卒業生が組員の道を選ぶという最悪の学校だった。

「で、理由はなんだったんだ？」

「お前には関係ねえよ」

つれない返事をして、翔は立ち去って行った。

——数日後、心配した昌也はこっそりと翔を尾行した。やはりあの公園へ向かっている。公園付近に到着し、ふと目を離れた隙に見失ってしまった。

「やばっ、あいつどこ行っただんだ？」

物陰からひっそりと公園を覗いてみると案の定、公園に面した道路には隣町の不良達が屯していた。

「6人か……今日は少ない方だな」

不良達を見ている視界の奥に障害者の女の子が姿を現し、こちらに向かつて歩いている。

「まずいな、このままじゃ奴等の所を通るぞ」

不自由な両足で一生懸命に歩いている女の子は、不良達の前を通り過ぎた。

「ふう……絡まれなくて良かったぜ」

何事も無かった事に安堵の表情を浮かべている。手には沢山の汗が握られていた。

その時だった、不良の1人が女の子の真似をして他の連中を笑わせ始めた。女の子は気にする様子も無く一生懸命に前へ前へと歩き続けている。不良達の終わらない馬鹿騒ぎと笑い声に、昌也は段々と苛立つてきていた。

しばらくして、女の子が昌也の隠れている場所に差し掛かった時だった、遠くてよく見えなかったが襟元まで涙で濡れていた。声を押し殺し立ち止まる事無く歩き続け、悔し涙を流している。

昌也は物陰から飛び出して連中に向かつて走り出した。

「調子に乗ってんじゃねーぞ!!」

突如、翔の叫び声が聞こえ、どこから現れたのか不良達の輪の中で暴れている。昌也が到着すると真似をしていた1人が倒れていた。翔は躊躇する事無く男の両足を押し折る。悲痛の叫び声が、周囲の人の目をこちらに向けた。

「おい、どうした、面白いんだろ？ 笑えよ…… 笑えっ!!」

押し折った足を更に踏みつけて大喝している。凄まじい迫力に圧倒され、他の連中は戦意を失い青ざめていた。

「おい、もうよせ。こいつらもこれで懲りるだろ」

優しく声を掛け帰ろうとした瞬間だった。次々と他の連中の両足を押し折っていく。

「……翔——！」

叫びも空しく、道路にはうごめきながらのた打ち回っている連中がいた。

「怖い……」

径子は青ざめた表情で昌也を見ていた。

「まあ、真似していた奴だけなら分かるが……全員はやりすぎだな」
昌也は何故か笑っていた。

第5話 連続殺人事件 〱痴漢〱

——港区：東京タワー——

東京を代表する名所の1つとして、大勢の人々に愛され続けている東京タワー。

エレベーターガールとしての誇りを胸に日々働いている洋子は、31歳を迎えていた。大人びた雰囲気を漂わせ、肩を少し隠すように伸びているストレートの黒髪が、上品に着こなしている紅色の制服と良く合っている。異性に興味がなかった訳ではないが、一途になつて仕事に打ち込んできた彼女から浮いた話を聞いたことがない。しかし、彼女目当てのリピーターを持つ程、ファンからは絶大な人気ぶりであつた。

そんなある日の事、いつもの様に乗客の案内を終えた洋子はエレベーターに乗り込んだ。大勢の乗客で混雑したエレベーター内、第一展望台へと向かつている。間もなくして、背後から覆い隠すように迫ってくる大きな影に気がついた。

「……（触られている？）」

腰からお尻の辺りに手の感触がする。混雑による気のせいかと思いたかったが、徐々にその手はエスカレートしていく。異変を感じ抵抗を試みるが、隅に追いやられていて動けない。男に覆い隠された洋子の姿は、大勢の乗客からは見えなかった。

「はあ……はあ……」

耳元で荒い息遣いが聞こえる。あまりの気持ち悪さに、洋子は下を向いた。無抵抗を確信したのか、男の手は内へ内へと進み始めた。

「……んっ（ちよっ……と……）」

遮ろうと抵抗を始めた手など気にもせず、動き回る男の手。押し

殺した洋子の声は、乗客達の賑やかな声にかき消されていた。

「お待たせ致……しました。第一展……望台へ到着……致しました」
執拗に攻め続けてくる指先に耐えながら、力の無い声を振り絞った。両足が小刻みに震え立っているのがやつの状態だった。第一展望台へと向かう大勢の乗客に紛れ、何事も無かったかのように男は姿を消した。

——数日後。

終電が姿を消した頃、薄暗く人通りの無い道を男は歩いていった。タクシー乗り場にも向かっているのだろう。ほろ酔い気分で歩いている男の前に、洋子が姿を現した。

「こんばんは。先日はどうも……」

「……（誰だ？）」

私服姿からなのか気がつかない様子で洋子を眺めていたが、ふと思いついたかの様に目を見開いて視線を逸らした。酔いも一瞬にして醒めた様子だ。

「女性の気持ちなんて解りませんよね？」

「……何の事かな？」

証拠がない事を盾にしらばくれている。しかし、疚しい気持ちからか洋子の目を見ることが出来ない。

「一緒に警察に行きましょう」

「な、何をさつきから自分勝手な事を……。人違いだよ人違い。それに、証拠でもあるのか？ 見せてみるよ……！」

逆ギレをして、その場から言い逃れようと必死になっている。そんな卑怯な男の姿を見て、洋子の目の色が変わった。

「自ら裁きを下すしかないようですね……」

「な、何をするってんだ……！」

洋子はゆっくりと宙へ舞い上がっていく。男は目を疑い、洋子の姿を目で追っていた。次の瞬間、男の首が胴から離れ地面に転がっていた。

第6話 連続殺人事件 共通点

——足立区：警察署——

国民の安全を守る。そんな正義に憧れて、司は警察官の道を選んだ。生真面目で一本気な彼は、身近な人達に始まり強いては国を守る。そんな使命感にも似た感情が彼を奮い立たせた。命がけで悪事を働く者達と向き合う日々。異例の速さで署長の座に昇進した彼も、43歳を迎えていた。

犯人の所在を突き止める任務を任されていた司は、署長室で資料と睨み合っていた。

「うーん……（『学』の所在をどうやって突き止めるのか……）」
ブツブツと言いながら考え込んでいると、ノックする音が聞こえた。

「失礼します。署長、ついに管轄内での被害者が出ました!!」

新たな事件の報告が舞い込んできたようだ。今月に入り、区内各所で発生している連続殺人事件の報告だった。司は関連資料を受取り内容を確認している。

「これで4件目の発生となります」

「犯行の手口は全て一緒……」

「はい、正面から刃物で真つ二つです」

コーヒー片手に、しばらく考え込んでいた。

「……おそらく『一鉄』が引き起こした【大暴走】以来の大事件ですよ」

興奮気味の部下を他所に、司は冷静に考えていた。

「他の3件に携わった関係者からの情報は？」

「奇怪な事だらけで、どの現場も犯人の目星すらつ付けておりません。しかし、被害者の共通点はある程度確認されています」

「共通点？」

「はい、男性と東京タワー」

「……東京タワーだと？」

腕組みをして眉をひそめた。

「はい、被害に遭う数日前に全員が東京タワーに立ち寄っています」

「防犯カメラに映っていた……か」

再び資料に目を通し考え込んでいる。

「現場には血痕が全く見当たりませんし、奇妙すぎます。巷では、呪いだの祟りだのと無茶苦茶な状態です」

「わかった、ご苦勞様。捜査を続けてくれ……（今回も相談するしかないか）」

部下の退室を見届け、司は携帯を手を取った。

第7話 連続殺人事件 ～ニュース～

——練馬区：Bar Change——

昼下がり、偶然にも翔はBar Changeの前を通りかかっていた。シャッターが開いているのを不自然に思い勝手に中へ入ると、準備に追われている昌也と径子を見つけた。

「あれ、何で店にいの？ デートじゃなかったのか？」

「お前、ニュース見てないの……」

昌也は忙しい手を止め、呆れた顔で翔を見ている。

「……俺がそんなもの見ねー事ぐらい知ってんだろ」

口を尖らせ息巻いている。

「連続殺人事件の被害者全員が立ち寄ってるんだとよ」

「……で？」

「径子が怖いからやめようって」

「まー君、ごめんね……」

「気にするな。嫌なのに行っても楽しくないしな」

シユンとした表情の径子を昌也は慰めていた。

「ふん」

よく理解出来ていない様子である。

——江戸川区：某所——

12歳にして学者顔負けの知識と知恵、千里眼を潜ませる少年・涼。戦略的な書物を読み漁り、戦術や罠の実践改良などもこなす、ちよつと危ない小学生。しかし、まだ甘いものが好きだった。

昼下がり、リビングの食卓でチョコレートを食べている。母親はソファに座りテレビを見ていた。ついている番組はもちろんワイドショーだ。

「ニュースをお伝えします。昨夜未明、連続殺人事件の被害者と思われる……」

「物騒な世の中ねえ」

「警視庁の発表によりますと、犯行の手口などから同一人物との……」

「……（そろそろかな）」

「東京タワーで、何らかのトラブルが原因と……」

「残念だったねー、せつかくの遠足だったのに……」

「しょうがないよ、それに僕だけじゃないしね」

……ジリリリリ……ジリリリリ。

電話が鳴っている。思い腰を上げ、母親は電話に向かって歩き出した。

「はい……あら、どーもいつもお世話になっております。お待ち下さい……」

涼を見て手招きしている。

「こんにちは。……はい、わかりました」

電話を切るや否や、リュックサック片手に出かける準備を始めた。

「もしかして、今回の事件？」

「うん、そうみたい」

「気をつけるんだよ」

「はい」

母の温かい抱擁を受け、涼は出発した。

第8話 連続殺人事件 〱推理〱

——足立区：警察署——

警察署に到着し受付に顔を出した涼は、すぐさま署長室へと案内された。ここを訪問するのはもう何回目になるのだろうか。ほぼ顔パス状態である。

「おつ、涼君わざわざすまないね」

司は首を長くして待っていたのか、涼の顔を見るなり喜んでいる。涼は簡単に挨拶を済ませ、案内されたソファーに腰掛けた。

「すでに知っているとは思うけど、これを見てくれ……」

涼は手渡された資料に目を通していている。その姿を見ている司は、毎度思うところがある。目では資料を見ているが、実際のところその奥に潜む遠くを見ている感じがしていた。

「（【潜在：アテナー】）……不思議な事件ですね」

〱アテナー〱 ギリシア神話に登場する戦争の知略を司る都市の守護神。知恵・工芸・学芸の神でもある。

〱能力〱 千里眼を開花させる。更に、知略を用い独自の罠を改良して相手を陥れる。

「そうなんだよ。正直お手上げた……」

司は飲み物の手配をして、頭を抱えている。

「……人の仕業ではないかもしれせんよ。不思議な力を持っている者達がいることは……」

「ああ、理解しているつもりだ」

「その線で事件を紐解くと辻褄が合ってきます」

「んっ、もう犯人を確信している言い方だね」

司は何とも言えない表情で訪ねた。

「はい、ある程度までは……」
「聞かせてもらえるかな？」

涼は差し出された飲み物を頂き、一息ついてから話し始めた。

「まず、正面からの切断なのに全員が無防備という点です。普通、正面から刃物が迫ってきたら反射的に先に手が出るはずだと思います。」

「……物凄い速さで突進してきたと考えたら？」

「どんなに速くても人の速度なら顎を引くなり身を縮込ませる方が速いと思います。なのに全員の首が無防備な状態になっていた……」
司は話を聞きながら、顎を引く素振などをして被害状況の確認をしている。

しばらくその仕草を繰り返していた司は、閃いたのか目を見開いて涼を見た。

「……上を向いていた？」

「はい、おそらく何かを見上げていたんだと思います」

「うん。しかし、犯人が上に何かを投げて見上げた瞬間について事も……」

「はい、それは否定できませんが、問題は血です」

「血痕どころか血の一滴も現場には無かった……」

司に限らず、事件を担当した同僚達が一番頭を抱えた部分であった。

「血を一滴も流させずに相手を斬る……」

「……【妖怪：鎌鼬】？……ってまさか」

「はい、僕はそうだと思います」

「……」

「それを操っている人が……」

「んー、確かに辻褄は合うが……動機は？」

司は話を遮り、納得のいかない表情を浮かべている。

「本人に聞くしかないですね。この人達から事情聴取して下さい」

「……エレベーターガール？」

涼の指差す資料の場所を見て、司の脳は錯乱した。その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「失礼します。署長、お電話が……」

警視庁のお偉いさんからの事で、2人は話を止めて涼は帰宅した。

——その夜。

司は呼び出された銀座高級クラブ・リジュームにいた。お偉いさんをホステス達が囲い、隣には絶世の美女と言われているクラブのNo.1が接待している。

「今回の事件だが、君に一任されたと聞いているが……」

「はい。管轄内で被害者が出ましたので……」

「あの大事件の主犯を捕らえた君だ。大いに期待しているぞ!!」

「……ありがとうございます」

「どうぞ……」

No.1から差し出されたお酒を受け取り、一気に飲み干した。

——数日後。

任意の事情聴取が行われ、数名のエレベーターガールが警察署を訪れていた。部下に案内された一同は応接室に通され、椅子に腰掛けた。

「皆さん、大変お忙しい所、ご協力頂きありがとうございます。今月に入ってから何か身の回りで変わったことなどはありましたか？」
司の質問に多少ざわつきながら答える一同。

「私は特に……何もなかったと思います」

「はい、私も」

「あの……痴漢に遭いました」

勇気を振り絞り1人が答えた。

「失礼ですが、犯人の顔などは……」

「仕事柄、振り向く事ありませんので……」

「そうですか……」

「あの、痴漢って立派な犯罪ですよね？」

突然、横から食って掛かるような口調で質問された。

「はい、もちろんです」

「もう少し警察の方々もそつちを厳しく……」

不満気な表情をしている。

「そうだね。いい迷惑だわ」

同調する彼女達。警察に対する不満が部屋に充満していた。司は取締る立場から申し訳ない表情を浮かべている。

「それでは皆さん、貴重なお時間を頂き、ありがとうございました」

司はお礼を述べ、急ぎ足でモニタールームへと移動した。そこでは、涼が一部始終を視聴していた。

「涼君、どうだった？」

「判りました……4人目の女性です」

「理由は？」

「本人が教えてくれますよ……」

涼は何か考えがありそうな表情を浮かべていた。

第9話 連続殺人事件 〱実証〱

——江戸川区：某所——

夕暮れ時、帰宅途中の涼は人通りのない道を歩いていた。しばらく歩いていると、背後から近づいて来る足音に振り向いた。

「ボーヤ……凄いいじゃない、まだ小学生なんですって……。帰りに渡された紙を見て驚いたわよ」

足音の正体は洋子だった。不敵な笑みを浮かべている。

「ごめんなさい……殺さないで下さい」

全身を震わせ、命乞いをしている。

「ごめんね……怨まないでよ（【操術：鎌鼬】）」

〱鎌鼬〱 鎌のような両手の爪を持つ妖怪。三位一体の姿で現れ、一匹目が人を倒し、二匹目が刃物で切り、三匹目が薬をつけていくため出血・痛みがない。

〱能力〱 鎌鼬を召喚して斬撃を繰り出す。自らも旋風に乗って浮遊する事が出来き、主に空中からの遠隔攻撃が得意。

洋子はゆっくりと宙へ舞い上がっていく。それを見た涼は瞬時にしゃがみ込んだ。頭上を凄まじい風が通り抜けていくのを感じた。

その姿に、洋子は目を見開き驚いた表情を浮かべている。

「ねっ、やっぱり操っていたでしょ？」

誰かに話しかけている。すると物陰に隠れていた司が姿を現した。「ふう、心臓が止まるかと思ったぞ。自ら囷になるなんて言うから

……」

何事も無かったことに安堵の表情を浮かべている。

「……嵌めたわね……」

洋子は怒り心頭の表情で見下ろしている2人を睨んだ。

「奇怪すぎて、実証するしかなかったんですよ」

「ばつちり撮れてるぜ……おとなしく自首するか？」

司は手に持っているビデオカメラを見せた。

「あんまり図に乗らないでよね……」

突如、鎌鼬が洋子を囲むようにして姿を現わした。

「げっ、3体もいるぞー!!」

「違いますよ、三位一体なんです」

「……………」

「屍が1つ増えるだけ……何も変わらないわー!!」

叫び声と同時に上空から鎌鼬が襲い掛かってくる。

「涼君、ちよつと離れていなさい」

涼を遠ざけ、立ち向かう司に鎌鼬が襲い掛かる。

「うわっ…………おっ…………」

三位一体の鋭い斬撃をかるうじて避けている。

「ふふ、死になさい…………」

空中から見下ろしながら笑っている。

「いつまでもやられっぱなしだと思ふなよ…………」

司は右手を拳銃のようにして構え、狙いを定めた。

「（【体技：空砲】）喰らえー!!」

「能力」溜め込んだ気合を形にして放出する。ただし、両手からしか放出する事が出来ない欠点を抱える。

浮遊している洋子に空気の銃弾が向かっていく。だが、撃ち込んだ銃弾のほとんどを鎌鼬に弾かれた。

「…………（他にも誰がいる!?）」

涼は何かの気配を感じ、辺りを見回している。

「…………あつらあ〜」

司はほとんどの銃弾を弾かれ参った表情を浮かべている。

「あんたも変な力を持つているような？」

「俺達だけじゃないと思うがな……」

睨み合いながら対峙している2人。

「司さん、他にも誰かいます!!」

その叫び声と共に気配が消えた事を、涼は悟った。

「えっ!?! 何だって?」

司は涼を振り返った。その一瞬の隙を突き、洋子は飛び去ろうと
していた。

「あっ!! 逃がすか……」

口ではそう言っただけで見たものの、為す術もなくあっさりと取り逃が
してしまった。

「取り逃がしちゃいましたね……」

涼は司の背中を見ながら苦笑いしている。

「……面目ない(だって俺は飛べないし……)」

司は口を開けたまま肩を落としていた。

「……(しかし、あの気配は一体何だったんだろう?)」

翌日、司は事件の決定的証拠として犯行手口を撮影した映像を提出したが、世間的・科学的に理解されず、洋子の指名手配は証拠不十分で終わった。

第10話 謎ゝ音郷道場ゝ

——文京区：音郷道場——

全国にその名を轟かす空手の名門・音郷道場。

門下生の熱く激しい稽古が続いている。そんな最中、学校から帰宅した香織は颯爽と道着に着替え姿を現した。明るい性格の典型的なおてんば娘で猪突猛進な行動が多々あるが、2代目師範の娘としてだけでなく門下生の憧れの的だった。門下生の視線を集め準備運動をしている香織に初代師範が気配を消すように近づいている。

「きゃ！！ もっつ、お爺ちゃんったら……胸を触らないでよね！！」

「ひえっひえっひえっ。脇がまだまだ甘いんじゃよ……お尻は気づかんかったのか？」

両胸を包み込むように押さえている香織に、爺はニタついた顔で逃げるように奥の部屋へと消えて行った。毎度の事ながら、そんな刺激的な光景を目の当たりにした門下生は、稽古に集中できずにざわついている。

「やはり老師は只者じゃないぞ！！」

「そりゃそうだろ。なんてったって……」

「大抵の奴なら、胸に届く前に指か手首を折られているはず……」

「ああ、いくら香織ちゃんが油断しているとはいえ……って、そっちかよ！！」

「こらっ！！ 無駄口を叩いてないで、稽古に集中しろ！！」

2代目師範は門下生に活を入れた。再び稽古に熱が入る。その姿に満足している師範は、ふくれっ面の香織の元へ歩み寄った。

「まったくもお爺ちゃんったら、皆の前で……」

「香織、『誠』君は休みか？」

「うん、テスト期間中なんだって……」

「そうか、大学生も大変だな……」

「あつ、そうだお父さん。この前『涼』君がね……」

「（小さな声で）こらこら、ここでは師範と呼びなさい」
「はい」

「ん？ 香織のテストはいつからだ？」

「高校生は来月からよ」

「そうかあゝ……来月……うーん」

師範は指導そっちの気で、何やらブツブツ言いながら考え込んでいる。

「こらっ！！ 娘に構ってないで、指導に集中しろ！！」

香織は師範に活を入れた。

第11話 謎 ー未確認生物ー

——文京区：東京大学——

夏休みに入り、香織は誠の運転で1泊2日の旅行先へと向かって
いた。晴れ晴れとした空の下、レンタカーは東京大学付近の大通り
を走行している。

「教授、あの未確認生物はこの辺に逃げ込んだと思うんですが？」

「ふむ、まだ遠くへは行っていないはずだ。手分けして探そう……」
なにやら生物学部の教授と生徒達が校舎周辺を搜索している。

「あいつらいつも追いかけてくるな。麻酔銃なんてアブねーもん持
ってるし、ここは逃げるしかない……」

その未確認生物は逃走中であつた。物陰に身を潜ませ、大通りを
渡るタイミングを計っていた。

「いたぞー！！ こつちだー！！」

生徒の叫び声が近くで聞こえた。慌てた未確認生物は大通りへ飛
び出して行つた。

その頃、香織と誠は宿泊先のイベント話で盛り上がっていた。

「他県からわざわざ見に来る程、花火が有名らしくてさ……」

誠はチラチラ香織を見ながら運転している。笑顔で話を聞きなが
ら前を見た香織は、何かが横断しているのが目に入った。

「ちょ、ちょっとまこつちゃん！！ 前見て前！！」

誠が前方を見ると、そこには獣か人か見分けがつかない何かがい
た。とつさにブレーキを踏んだ。周囲にブレーキ音が鳴り響く。跳
ねた感覚は無かった。どうやらその何かは轢かれずに逃げていつた
ようだ。安堵の表情を浮かべている2人。

「何だったの？ 熊っぽく見えただけ……」

「危なかった、轢かなくて良かった」

「もう、ちゃんと前見て運転してよね!!」

「ごめん。これからは気をつけるよ」

気を取り直し、2人は旅行先へと車を走らせた。

現場を目撃していた生徒達は啞然としていた。数名は腰を抜き、青ざめている。

「……教授、あの生き物……もの凄い動きをしましたね」

「まさに珍獣だ……捕獲したら生物学界を揺るがす発見になるかもしれない!!」

教授の目の輝きとは裏腹に、生徒達は未確認生物への恐怖に襲われていた。

第12話 謎ゝ吾駒運送ゝ

——石橋山古戦場——

頼朝拳兵の地として知られている石橋山古戦場。高速を降りた車は海岸沿いを走行していた。晴れ渡る空、目の前には広大な海が広がっている。

「わぁー……綺麗な海」

「まだ1時間近くかかるな。ちよつと休憩する？」

「そうだね。海を見たいわ」

車を近くの路肩に停め、2人は心地よい潮風に吹かれ景色を眺めていた。打ちつける波の音が心を癒していく。

「……今回の旅行だけど。師範は怒ってなかった？」

「ううん、むしろ喜んでたよ。お爺ちゃんは寂しそうだったけど……」

誠はその言葉に若干の笑みを浮かべているが、少なからず抵抗を感じていた。いくら親公認の恋人同士とはいえ、香織はまだ高校生である。

「私はね……まこっちゃんとうろしていられるだけで幸せ」

誠を見つめ、恥ずかしそうに照れた表情を浮かべている。誠は微笑みながら優しく抱き寄せた。2人の顔がゆっくりと近づいていく。

「お母さーん！！ お父さーん！！」

遮るように、少女の叫び声が遠くから聞こえた。2人は声のする方へ駆け出し山間の道を曲がると、そこには地元の人達と思われる人だかりが出来ていた。

「まこっちゃん、上見て！！」

香織が指差した崖の上から事故車両が顔を出している。今にも落下しそうだ。姿こそ見えないが、その車両から少女の叫び声が聞こ

える。

「すいません。崖の上に行く道はどこにありますか？」

見渡す限りそれと思われる道がなく、誠は地元の人に尋ねた。

「あそこに行くには、ずっと先の道を迂回するしかねえよ」

「それじゃー間に合わない……」

誠は登れそうな場所を見つけて、急いで崖を登り始めた。

「あーどうしよう。何もしてあげられない……」

香織は落ち着かない様子で事故車両を見上げている。その間にも、ジリジリと車両は傾き始めていた。

誠はなんとか崖の上に到達し事故車両へ走り出した。しかし、まだ100m以上の距離がある。全力で走る誠の視界に、対向車線から1台のトラックが現場近くで停車するのが見えた。

「まこっちゃん、急いで!!」

崖を登りきった姿を見届けた香織は、大声で叫んだ。事故車両は限界を超え、ゆっくりと落下し始める。

「くっ……（間に合わない!!）」

走る誠の耳に、崖下から大勢の悲鳴が聞こえた。

「きゃあ!! ……えっ？」

崖下にいる香織達からは、落下した事故車両が宙に浮いている様に見えていた。ざわつき騒ぎ始める人ばかり。

現場に到着した誠は目を疑った。トラックの運転手が、煌々と輝いている右腕一本で車両のテール部分を掴んでいる。そして、ゆっくりと引き上げ始めた。誠はその姿を見て、無言のまま立ち尽くしている。引き上げた車のドアを開け、トラックの運転手は少女を抱きかかえた。

「もう大丈夫だ。怖かったな……」

「……お父さん、お母さんは？」

全身を震わせている少女は声を振り絞った。落ち着かせた少女を誠に預け、車両に向かって歩き出した。中を覗き込み両親の様子を窺っている。そして、再び誠の前へと歩み寄った。

「気を失っているが、大丈夫だよ」

「ありがとう……」

精一杯の声でお礼を言った少女は、誠の腕に抱かれたまま大声で泣き出した。

「後は頼んだぞ、青年……」

誠に後事を託し、トラックへと歩き出した。

「すみません……あの、お名前は？」

誠の問いに振り向きもせずに無言のままトラックへ乗り込んでしまった。走り去るトラックに書かれている会社名を見ていた。

「……（吾駒運送？）」

「まこっちゃん、大丈夫？」

香織が崖下から叫んでいる。報告がてら顔を出しに行こうとした時だった。目の前に両親が現れ、誠は抱きかかえていた少女をおろした。どうやら意識が回復したようだ。特に2人には外傷は見られなかった。

「この度は、本当にありがとうございました」

「あつ、いえ、あのですね……」

誠は目の前で起きた衝撃的な事実をありのまま伝えた。両親はにわかに信じられない表情を浮かべている。すると母親の腰に抱きつきながら少女が口を開いた。

「そうだよお父さん。大きなおじさんが助けてくれたんだよ」

父親は娘の顔を見ている。再び崖下から香織の声が聞こえた。

「まこっちゃんってばっ！」

誠は思い出したかのように走り出し崖下を覗いた。香織達に無事を伝え、再び両親の元へ向かった。そして、トラックに書かれていた吾駒運送の事を知らせると、父親は連絡してみると告げ、頭を下げてお礼を言った。

誠は親子に挨拶を済ませ、崖を下りた。香織を呼び寄せ車へ向かって歩き出す。しばらくすると、パトカーと救急車のサイレンが聞

こえてきた。

2人は車に乗り込み旅行先へ向かう。

「あの家族、無事で本当によかったね。でもさあ……あの時、何があつたの？ とても不自然だった……」

どこか浮かばない表情で運転をしている誠は、見たままを話した。
「えー嘘！！ 私達からはトラックもおじさんも見えなかったよ……気になるの？」

「（あつ！！）……ごめん。2人の時間を大切にしよう」

横顔からでも分かる優しい笑顔に、香織は嬉しそうにキスをした。

後日、誠は様々な方法で吾駒運送を探したが、存在していなかった。

第13話 五虎将 へ出会いへ

——北区：華艶——

翔は昌也の所用に付き合い北区を訪れていた。用件を済ませた2人は122号線沿いを歩いている。太陽は真上に顔を出していた。

「おい、あいつの話長すぎだぞ……」

「悪い悪い、あーゆー人なんだよ」

Bar Changeの開業を手助けしてくれた恩人に会いに行っていたようだ。

「あーそれより腹減った。ここはどこだ？」

「北区だなこの辺は……じゃー適当に入るか」

大通り沿いに見えた小さな中華料理店へ、2人は向かった。

「いらつしやいませ……」

翔は暖簾を潜って立ち尽くしている。店内を忙しそうに走り回る中国人女性に目を奪われていたからだ。

「おい……何してんだよ。早く行けって」

昌也にせっつかれ、空いているカウンター席に2人は腰掛けた。注文を終えて間もなく、昌也は翔の変化に気がついた。

「お前、もしかして……」

「……な、何だよ」

横目で翔を見る昌也。翔は何も言われていないのに顔を赤らめていた。

「……（分かりやすいなコイツ）」

「こ、この店のお名前……何だったわけ？」

目が泳いでいる。翔は白白しく話題を変えようとしていた。

「暖簾には華艶って書いてあったぞ」

「……そ、そうだよな。書いてあったあった」

「……（コイツまた来る気だな）」

そんな会話をしていると、厨房の奥から声が聞こえた。

「凜、運んでくれ……」

20歳を迎えた凜。天然ぼけが多少見受けられるが、礼儀正しく争いごとが嫌い。常にチャイナドレスを身に纏い、中華民族である事を誇りに思っている。

「……（あの子、凜ってゆー名前かあ）」

「……（決まりだな）」

翔は凜をじつと見つめ、落ち着かない様子だ。間もなくして、2人の注文が運ばれてきた。

「おまちどうさま」

「……に、二ーハオ……」

翔はとりあえず笑顔で話しかけた。

「何言ってるんだ？ おい、見すぎだ、お前見すぎ……」

凜は笑顔を残し、また厨房へ戻っていった。

「まーさーやー。どうしたらいい、どうしたらいいんだ？」

「お、おい、落ち着け。腹が減っては……だ、とりあえず食うぞ！」

ゆっくりと食べ始める昌也、隣からガチャガチャと音がうるさい。翔が勢いだけで食べている。食事を終えた2人は、一息ついた。

「まあ、言いたいことは分かるが、とりあえず今日の所は様子を見よう」

「……（さっきの笑顔可愛かったなあ）」

「聞いてんのか。じっくりゆっくり時間をかけてだな、徐々に慣れよう」

「わ、わかった」

「……（もうあれから何年経つんだ……複雑だな）」

昌也は遠くを眺めながら物思いにふけていた。翔はソワソワしながら凜を見続けている。

「出前に行つてきまーす!!」

ふと店内を見渡すと数名の客しか残っていなかった。

「……（ああ、いつてらっしゃーい）」

もう、翔の目には凜しか映っていなかった。

第14話 五虎将 〱約束〱

——文京区：音郷道場——

凜は音郷道場へ到着した。バイクを止め、インターフォンを押す。
「こんにちわー、華艶です」

「はい。今行きまーす」

インターフォンから香織が答えた。道場の奥からバタバタと足音が近づいて来る。

「凜さん、こんにちは。遠いのにもいつもごめんね」

「大丈夫だよ。いつもありがとう」

月に数回だが、出前をしている内に自然と2人は仲良くなっていた。

「みんな大好きなんだよね。華艶の炒飯」

「ありがとう。老師は元気ですか？」

初めての出前で訪れた時に、凜は爺に胸を触られた過去があった。

「うん。今日は留守だけど。……あつ、そうだ」

今度の休みの日にでも、渋谷へ買い物に行こうと誘っている。

「うん。連絡ちょうだい」

凜は笑顔で手を振り、道場を後にした。

第15話 五虎将 〱友情〱

——北区：華艶——

その頃、翔は昌也から興味の無い話を聞かされていた。

「だ・か・ら……その【五虎将】ってなんだよ？ ……（凜ちゃん早く戻ってこないかなあ）」

「あーそっか、お前長いこと居なかったもんな……」

翔は入口を見つめ、昌也の話を上の空で聞いている。

「いつごろだったかな、東京で最強は誰だ……みたいな話が出始めてさ……」

「なんだそれ……どーでもいいわ（次はいつ来ようかな……）」

突然、翔の目が輝いた。

「ただいまー！！」

「！！（あつ、おかえりー）」

凜が出前から帰って来たようだ。獣のようにその姿を目で追っている。

「おい……で、墨田区の『一鉄』しかいないだろって始まって……」
翔は昌也に後頭部を見せている。

「23区を制覇した男だ。知ってるだろ？ 後にも先にもこの偉業を成し遂げた者はいない」

「18年も前の話だろ。……実在するのかね？ ……（凜ちゃん可愛いなあー）」

「……いるだろ、バカー！！」

「次は？ （俺だろ）」

「新宿区の“孤高の剣豪”『麗』。歌舞伎町N.O.1ホストだ」

「知らん……（凜ちゃんこっち向いてくれないかなあ）」
「裏の世界じゃー知らない奴はいないってよ」

「次？（そろそろ俺か）」
「ご存知『直人』！！ あいつ今“傭兵”って呼ばれてんだぜ」
「何っ！！ あいつ……（直人がランクインしてるなら次こそ俺だろ）」

「そして……中野区の『誠』」
「……ぐえっ（俺じゃないのかよ）」
「んっ、どうした……すげー良い奴らしいんだが……」
「が？」

「一度戦闘になると全てに対応してくる天才なんだとよ」
「……（あつ凜ちゃん笑ってる）」
「おそらく現時点では最強じゃねーかって……」

「（はっ、そうだ俺は死亡説が流れてたんだっけ）……ブツブツ。
（だから候補にならないのか。そーだ、そーに違いない）……ブツ
ブツ」

「何ブツブツ言ってたよ。最後の一人は……」
「もついいや、興味ねえー（凜ちゃん見ていたいし）」
「はっ？」

「どーせつまんない奴だろ」
「……ある意味当たってる。……お前だ」
「だろー【五虎将】なんてつまんない奴ばっか……って、ええ！？」

「俺はいつでもお前が最強だと信じている」
「お、おお……兄弟よ。死ぬときは一緒だよな？」
「……嫌、それは遠慮しとく」
「うおおい！！ この涙どうしてくれるんじやい」

「おい、その兄ちゃんうるせーぞ!!」

翔の騒ぎ声を他の客が叱りつけた。

「何だと?」

「アイヤー、喧嘩はやめて!!」

「御意っ!!」

「うるっさい……武士かお前は……（大田区あの男は……まあいいか）」

第16話 治安部隊ヒーロー 杉並区の英雄

——練馬区：Bar Change——

翔はカウンター越しに昌也と会話をしていた。

「お前、戻ってからしばらく経つけど『仁』には連絡したのか？」

「なんでイチイチ連絡するんだよ」

「お前が居ない間、結構大変だったらしいぞ」

「なんだそれ？」

「杉並区的安全神話が崩れそうになったんだとよ」

「それって勝手にあいつが言ってるだけだろ？」

「そうでもないらしいぞ。実際、犯罪件数が最小の区になったみたいだし」

「ほーそれは3本槍の功績なのか？」

「どうだろうなあ。今じゃ13番まで部隊があるらしいし」

3本槍とは、仁が代表を務める治安部隊組織の旗揚げ時より付き従う1・2・3番隊の隊長達の事である。

「……でも、警察には煙たがられてんだろ？」

「あいつら戦闘までこなすからな……でも、区民の人気は絶大らしいぜ」

「それで増えたのか……しょうがねえなあ、今度顔でも見に行くか……」

第17話 治安部隊ヒート 〱無双〱

――杉並区：善福寺公園――

――数年前に遡る。

治安部隊ヒートの事務所に、2番隊隊長の溝口が駆け込んできた。
「仁、吉祥寺の奴ら久々に善福寺公園を狙ってきたぞ!!」

治安部隊ヒート代表の仁、現在29歳。“神速の蹴り”の異名を持ち、堅実で手堅く、良識があり仲間を大切にする人物。ある時、警察には出来る事と出来ない事があるのを悟り、旧知の仲間達と治安部隊を結成する。その後、この組織は……。

「最近やつとおとなしくなったと思っていたのにな……」

「ああ、とりあえず3・7・8番隊を向かわせている」

「わかった」

吉祥寺の連中が度々、杉並区の領土を狙っていた。特にこれと言った人物はなく、数任せの相手にそれほど警戒をしていなかった。いつものように、鎮圧の報告を待っていると、9番隊隊長の三浦が駆け込んできた。

「仁さん、大変です!! 3部隊が壊滅状態との連絡が……」

「何だと!? 仁、全部隊に召集をかけるか?」

「まだだ、他の地区の情勢も気になる。……とりあえず向かうぞ」
仁達は急ぎ現場に向かった。

しばらくして、仁の友人である信人が事務所を訪れた。

この人物、無類の酒好きで仁の親友である。現在55歳。大工の頭領でもあり、人情派の熱い男である。

「仁は居るかあー？」

「あつ、信さんこんにちは……」

事務所に待機している10番隊隊長の岡本。信人は事務所の雰囲気
気がいつもと違うことに気がついた。

「誰も居ないな……何かあったのか？」

「いえいえ、特に何もありませんよ」

「……そうか。たまには顔出しに来いって伝えてくれ」

「あ、はい、わかりました」

信人は不服そうに事務所を後にした。

その頃、仁達は最前線の本陣に到着していた。真っ先に溝口が状
況を聞く。

「吉祥寺の蔵野達の仕業なのか？」

「はい。総勢150名程です。3番隊隊長：今川さん、8番隊隊長：
清水は病院へ運ばれました」

答えているのは、7番隊隊長の小木である。

「いつもの3倍近いじゃねーか」

「仁さん……申し訳ありません」

「気にするな。詳しく教えてくれ」

落ち着いた表情で仁は問いかけた。

「いつになく、蔵野の奴が正面から強気で攻めてきました」

「数まかせの総力戦ですかね？」

三浦が口を挟んだ。

「最初は今川さんの活躍で驚くほど互角に戦えたんですが……」

「……どうした？」

「1人の男が現れてから状況が一変しました」

小木は、少し青ざめた顔をしている。溝口が問う。

「その男は誰だ？」

「私には分かりませんでした。今川さんが逃げろって……」

「至急、そいつを調べてくれ」

仁は三浦に指示を出した。

「……あいつは強すぎます」

下を向き、恐怖に怯える小木。

「……各部隊長には持ち場の治安を維持しろと伝える」

「遠征に出して修行させている弘道はどうすんだ？」

「あいつは俺の後継者だ。そのまま修行させておけ」

仁と溝口が話している所へ、三浦が血相を変え戻って来た。

「大変です！！ 男の正体が解りました……“傭兵”『直人』です
！！」

「ぶー、【五虎将】じゃねーか！！」

「ああ、【無双】の使い手だ……」

慌てふためいている溝口とは対照的に、仁は落ち着いていた。すると今度は、小木が駆け寄ってきた。

「た、大変です！！ 弘道が遊撃隊になって背後から攻めますって
……」

「誰が連絡したんだ？」

「弘道から事務所に連絡があって……岡本の奴、しゃべっちゃった
みたいです」

「危険ですよ！！ 弘道は“傭兵”がいることを知らない……」

「連絡はつかないのか？」

「何度連絡しても繋がらないんです」

「『直人』と150に対して、こっちは遊撃隊の弘道を含めて40
弱。……どうすんだ、仁？」

ずっと無言で聞いていた仁は、口を開いた。

「次の衝突の際は……俺が『直人』と戦う」

「何？」

「聞いた噂だが、1回の戦闘が100万らしい。おそらく蔵野達じ
ゃー200万を集めるのが精一杯だろう」

一同がその話に沈黙している。三浦が口を開いた。

「次の戦闘で資金が尽きるって事ですか？」

「おいおい、そんな噂信じるのか……」

「『直人』さえいなければ何とかなるだろ？」

「馬鹿言うな俺が行く。簡単に大将を出せるかよ!!」

「俺がいきますよ!!」

「……立ち向かっていけるか自身がありません」

「無理はしなくていい。【五虎将】の戦闘を目の当たりにしたんだ

……」

怖がる小木に優しく微笑んだ。

「お前も十分体験してるだろ？」

無言の溝口に、仁は語り掛けた。

「絶対的不利な状況だ、作戦を練るぞ!!」

——善福寺公園入口。日が沈み、辺りは暗闇に包まれていた。

見張りの前に信人が姿を現した。

「うつひゃつひゃ。……ういゝ」

「な、なんだこの酔っ払いは……おい、おっさん。ここで何をして
いる？」

「池で魚でも釣ろうかと思ってねえ」

「もう夜だ。それに状況が見えないのか……ここは戦闘地区なん
だよ」

「えっ!! 魚が寝てるって……」

「言ってねえよそんなこと……怪しすぎるぞコイツは。とりあえず
連れて行くか？」

「ちっ、しょうがねーな」

見張りの数名が面倒臭そうに信人を連行していった。その頃、敵
陣の背後に到着した弘道と補佐役の佐助。

「どうにか間に合ったみたいだな」

「ああ。妙に静かだぜ」

「これからどうする？」

「とりあえず、仁さん達の動きを見極めないと」

「それにしても数が多くないか？」

「いつもの倍以上はいるな……」

本隊の動きを見極めようと、13番隊の10名が敵陣の背後で息を潜める。

連行された信人は敵の本陣へ到着していた。

「失礼します。入口に変な奴がいましたので連れてきました」

「んーなんだ？」

蔵野は入口を振り返った。

「ういゝひいつく。……ご苦労様」

豪腕をうならせ見張りの数名をぶっ飛ばした。

「敵だ！！ 集まれ！！」

蔵野の叫び声に、すぐさま20名程の兵隊が集まった。

「敵本陣に1人で来るとは……いい根性してるな」

「友の危機なんぞな。……暴れさせてもらうぞ」

豪腕のうなりに敵兵は次々と倒されていく。

「何者だ、貴様？」

「ただの酔っ払いだよ。……覚悟しな」

「うわぁ！！ ……直人さん、直人さん」

歩み寄る信人に恐れをなした蔵野は、直人の名を叫びながら本陣の奥に逃げ込んだ。

「……苦戦してる理由ってそーゆー事か」

信人は歩みを止め、顔が引きつっている。まもなくして、奥の部屋から直人と蔵野が何やら話をしながら姿を現した。

「この戦闘で終わりだが……いいんだな？」

「ああ構わねえ。（また『清』さんに連絡すればいいさ）」

直人は信人を見た。

「じゃあ……始めようか？」

「待て、ここじゃ狭い。外で存分に楽しもうじゃねえか」

「……お好きなように」

信人は外に出るなり、すぐさま大木を引き抜き手を加え、巨大な六角棒を作った。

「うわっ、なんだこいつは!!」

それを見ていた兵隊が驚いている。信人は片手に携えた六角棒を直人に向けた。

「なにか不服でも？」

「……問題ない」

「そんじゃー遠慮なくいくぞ!!」

大木並の六角棒を小枝を振るうようにブンブンと振りまわす。直人は軽々しくそれをかわしている。

「ちっ、全然あたんねー……年は取りたくねーな」

攻撃し続けるが、疲れの色が出始めていた。

「終わりか？　じゃあ、こっちも遠慮なくいくぜ（【呪縛：無双】）」

「無双」 古の武将達の呪いにより、あらゆる武器を使いこなす。

「能力」 無双の呪いからあらゆる得物を出現させる。しかし、得物を持たない肉弾戦は不得意。

突如、直人の全身がほのかに青く光り手に長槍が現れた。

「【無双】の力か……（やばい、俺も変身を……）」

「無双・螺旋突!!」

閃光の一突きが信人を貫いた。

「ぐはっ……（ちっ、間に合わなかったか……）」

信人は、苦悶の表情を浮かべ膝から崩れ落ちた。

「決まりだな」

蔵野は不敵に笑っている。

「仁さん、敵陣が慌しい動きをしています」

「……………」

「弘道達じゃねーだろうな……………」

「突っ込みますか？」

「…………暗くて判らないがもう少し様子を見よう」

「うおっ、なんだ今の稲妻みたいな青光りは？」

「………全員突撃！！」

「おっ、よっしゃーいくぞー！！」

息巻いて突撃していく溝口。その頃、身を潜めていた弘道と佐助。

「動いた！！」

「……総攻撃か？俺達も突撃だ！！」

本陣の動きに呼応するように、背後から急襲する。

本陣に戻っていた蔵野の元へ報告が入った。

「大変です！！敵の総攻撃が始まりました」

「何が大変なんだ。3倍近い兵隊がいるんだぞ…………潰せ！！」

「帰るぞ……………」

「えっ！！あつ、ちょっと待っててくれませんか？」

直人の帰るそぶりを見て慌てた蔵野は、急いで連絡をしている。

「もしもし、『清』さんですか。…………な状況でして」

「くつくくつ、楽しませてもらったぜ…………。諦める、追加融資はもうできんな……………」

『清』の言葉に、蔵野は腰を抜かした。そんな蔵野に、次々と報告が上がってくる。

「大変です！！背後からも敵が現れました」

「…………ひい」

直人が去り。数だけの蔵野達は全滅した。

第18話 パンダマン 〽歓喜〽

——練馬区：Bar Change——

夜9時、店は最高潮の賑わいを見せていた。忙しく動き回る昌也の携帯に翔からの着信が入った。

「昌也、やったぞぉー!!」

大きな叫び声が鼓膜を直撃した。あまりの衝撃に、昌也は携帯を遠く離し手で耳を塞いでいる。そして、表情は大きく歪んでいた。

あの日以来、翔は華艶に通い続けた。そして、ついにデートの約束をした直後だったらしい。遠く離れた携帯から、喜ぶ声が聞こえるほどだった。

「お、おめでとう……で、どこに行く予定なんだ？」

「おお、パンダが見たいって……」

「そしたら上野動物園か？」

「そうそう。でさ……」

店の営業を終え、昌也は径子と酒を酌み交わしながら話をしていく。

「恥ずかしいから俺達も来いって……」

「わぁー、私もパンダ見たい!!」

「勘違いするなよ。翔を影から見守る役目だから……」

昌也はまだ耳鳴りがするのか、耳を気にする素振りをしていた。

第19話 パンダマン 〱 シュンマオ

――台東区：上野駅――

デート当日、快晴に恵まれ、あたかも天が2人を祝っているかのようにだった。緊張した面持ちで翔は待ち合わせ場所にいた。しかし、30分が過ぎても凜の姿が見えない。

「……（も、もしやドタキャン？）」

最悪の事態を思い浮かべ、緊張と焦りで落ち着かない様子だ。その姿を物陰から見守るように、昌也と径子の姿があった。

「遅いね凜ちゃん……あつ、来た！！ あれそうじゃない？」

無言のまま翔を見ていた昌也は、安堵の表情を浮かべている。

「遅くなつてごめんね」

翔はチャイナドレスを身に纏った姿に見とれている。とても幸せそうな顔だ。

「ねえ？……行こうよ」

「お、おお（可愛いなあ～）」

まだ手こそ握れないものの、寄り添って歩く2人。

「なんだか翔さん、幸せそうだね」

「ああ、幸せになつてもらいたいな……」

――台東区：上野公園――

上野動物園の入口に到着した翔と凜。そして、気づかれないように尾行する昌也と径子。翔は係員の手を持っているプラカードを見て青ざめた。

「うげっ！！ 入場制限だと……」

動物園は連日の大盛況。パンダの人気を甘く見てはいけない。

「只今、大変混雑しております為……」

係員がメガホンで何やらアナウンスをしている。

「さ、3時間待ちだと……!」

翔は呆然と立ち尽くすしかなかった。凜は残念そうな表情を浮かべている。もちろん昌也達にも情報は伝わっていた。

「凜ちゃんって仕事あるんだよね?」

昌也はなんとも言えない表情をしていた。

「残念だけど、しょうがないよね……」

「……（こんな俺に、神様は微笑まねえか）」

「仕事まで時間あるし、園内を散歩でもする?」

凜は笑顔で話しかけた。その笑顔に癒され、一緒にいれる事に幸せを感じた。翔に笑顔が戻り、2人は不忍池の方向に向かって歩き出した。その姿を見届けた昌也。

「大丈夫そうだな。よし、俺達もどっか行くか?」

「映画を見たーい!!」

昌也と径子は、仲良く手をつなぎ映画館へと向かった。

不忍池に沿って歩く翔と凜。仲良く歩く姿に初々しさが漂っている。

「ん? あれは……」

そんな姿を見ていた的屋が何処かに連絡をしている。

「どうした?」

「若頭、翔の奴が目の前を歩いているんで……」

「ばかやろう!! そんな事でいちいち連絡してくるな」

「あ、はい。すいません」

「それより、ちゃんと売れてんだろぅなあ……たこ焼き?」

「そ、そりゃーもちろんですよ……はは」

どうやらこの的屋、【侠狼会】の者らしい。

そんな的屋の慌てふためく姿など御構い無しに歩き続ける翔と凜。

至福の時間が流れている。

「でも、3時間待ちだなんて驚いたね」

「いつその事、パンダが檻から脱走してしまえばいいのに……」

「あはっ、入場制限しなくてすむもんね」

しばらく散歩していると会社員と思われる30名程の集団が宴会をしていた。会話が弾み、幸せそうな2人が横切る姿を彼らは見ていた。

「ヒューヒュー、これからどちらまでえ」

「そりゃーそちらに向かって歩いてるんだから、聞かないでえ」

かなりの酒が入っているのだろうか。調子に乗った酔っ払い達の野次が飛ぶ。

「野郎……」

「翔。喧嘩はだめだよ」

凜の言葉にその場をやり過ごそうとする翔。

「中国人を相手にいい気になるなよ」

「いやあゝあれはコスプレ好きかもしれんぞ」

ギャーギャーと野次がエスカレートしていく。

「私は大丈夫よ。こーゆーの慣れっこなんだから……」

凜の笑顔だけが翔を押し留める唯一の救いだった。

「へっ、可愛い顔して売春なんじゃねーのか。お金なら沢山……」

凜の表情から笑みが消えた。その瞬間だった、翔は集団に向かって走り出した。

「テメーラみたいな奴らがいるから、何もかもが歪むんだよ……」

うおお……（我に眠りし修羅よ今日覚めよ）

「翔……」

瞬時に野次を飛ばしていた5人の顎を砕き、残りの集団に睨みを利かせて殺気を放った。恐れ慄きながら減らず口を叩く会社員。

「お、お前、亀柴商事に手をだして、ぶ、無事でいれると思うなよ」
「亀柴商事ですって……」

何やら凜の表情が硬い。

「だまれ狐共がつ！！ 虎のお出ましを待っててやるから早く呼べや……」

翔は目で会社員達を殺している。

「翔、もうやめて！！」

「呼んだかね？」

どこからともなく声が聞こえた。辺りを見回し、ざわつく会社員達。

「どこだ？」

「いた！！ あそこの屋根の上だ……」

発見した会社員が指差す先に、背を向け仁王立ちしている何者かの姿があった。翔と凜もその先に視線を向けた。

「…… 本当に脱走？」

「シユンマオ！！」

凜に笑顔が戻り、目が輝いている。会社員はその異様な姿にざわついている。

「なんでパンダがここにいるんだ？」

「馬鹿、どう見てもきぐるみだろ……」

「何者だお前は？」

どう見てもパンダのきぐるみを着ている様に見えるが、パンダ体型の男がパンダ柄の全身タイツを着ている様にも見えた。どっちにしろ異様な姿だ。男は振り返って語り始めた。

「俺の名は“パンダマン”。平和とパンダをこよなく愛する正義のヒーローだ！！」

通称“パンダマン”。パンダ体型でパンダ柄の全身タイツ、顔はペインティングしているという噂。自分を正義のヒーローだと思うっており、悪に対しては容赦しない。全てにおいて、謎多き男……。事態がよく飲み込めないのか、静寂が辺り一面を覆いつくしていた。

「自分でヒーローって言っちゃったぞ、あいつ……」
会社員の一人が静寂を打ち破るように口を開いた。

「ちっ、ただの変態か……」

翔は見下した目線でパンダマンを見ていた。

「大丈夫だよお嬢さん、何も言わなくていい。状況は把握できた……」

「……」
屋根から飛び降りたパンダマンは、一目散に翔を目掛け襲いかかった。

「お前が悪の元凶だな……問答無用!!」

「ちょ、ちよつと、違う……」

「邪魔だ!!」

翔の裏拳でパンダマンはあっさりぶっ飛んでいった。

「……弱っ!!」

会社員の面々はあまりの弱さに驚いた。

「ちっ、邪魔が入ったが亀柴商事が何だって？」

再び会社員達に向かって歩き出す。すると背後から気配を感じ、翔は振り返った。

「（【变身：鬼熊】俺をこの姿に変えさせるとは……）」

「鬼熊」 熊の妖怪。怪力の持ち主で、人と同じように直立歩行し、家畜の牛馬などを襲う。

「能力」 3 m程に巨大化し怪力を得る。パンダ柄はそのまま継続されるらしい。

パンダマンは【妖怪：鬼熊】に変身していた。

「どっちにしろ、俺には勝てんと思うが……」

「ぐがああ!!」

雄叫びと共に振り下ろされる熊手。防御はしたが、その威力をまともに受けた翔は片膝を着いた。

「くっ……（パワーはあるみたいだな）」

翔とパンダマンの一身一体の戦闘が続いていると、会社員の1人

が何処かへ連絡をし始めた。

「もしもし、社長ですか。大変お忙しい所、申し訳御座いません」
「どうした？」

「上野公園で飲んでるんですが……」

社長に状況を伝え、助けを求めている。

「ほお……（“皆殺”の翔だな……）」

「……どうしたらよろしいでしょうか？」

「お前達じゃ100人いても敵わんよ。今のうちに逃げときな」

「……はい。分かりました」

全員にその旨を伝え、翔とパンダマンの戦闘が続く中、隙を見て次々と逃げていった。

「ちっ……（しぶといな。こっちも全力でいくか）」

「ゼエ……ゼエ……（なんだこの強さは……）」

「（【潜在：ヘーパイストス】）火鳥扇……！」

「ヘーパイストス」ギリシア神話の火山・炎・鍛冶の神。

「能力」火系の攻撃を得意とする。得物、打撃に炎を宿すことが出来る。

翔とパンダマンの間を火炎の扇が通過した。翔は目を真ん丸にして凜を見ている。

「シユンマオ……ちょっと待って……！」

凜は火鳥扇を持ったままパンダマンに近づいて行った。

「アチツ……！（動物に火を向けないで……）」

「勘違いよ。悪いのは……」

凜が見た先に会社員達の姿は消えていた。

「あのね、この人は……翔は私の……」

「……えっ（何？）」

翔はドキッとした表情で凜を見ている。

「冷静に状況を把握したんだが……私の勘違いでしたね」

「あっ……！（こらパンダ野郎、話を遮りやがって）」

翔はパンダマンに向けて変な顔をしている。

「大変申し訳かった……危うく怪我をさせてしまう所でした」

「こらこら……（よく状況を見る……）」

翔は怪我をしてるのはお前だよって顔をしている。

「助けてくれようとしたんだね。シェイシェイ」

「なあゝに、礼には及ばん。正義のヒーローの宿命さっ……！」

言いたい事を言い切ったのか、パンダマンはふらふらとよろめきながら去って行った。

「ちっ、あいつのせいで逃がしちゃったじゃねーかよ……」

「翔……ありがとう」

涙ぐんでいる凜をそっと抱きしめようと両腕を広げた。

「あっ、大変……！ 仕事の時間に遅れちゃう。帰らなきゃ……」

両腕は広げられたままフリーズしている。

「そ、そうだね。帰ろっか……」

翔は恥ずかしそうに両腕を下げ、次に会う約束を言い出せずに上野駅まで凜を見送った。

心に空いた虚無感を抱え不忍池が見える公園のベンチに戻り、水面に浮かんでいる蓮の花を見ながら1人たそがれていた。

第20話 靖国神社 へ参拝へ

——千代田区：靖国神社——

蝉の合唱が最盛期を迎えている。降り注ぐ日差しが心地よさを通り過ぎ、苦痛に変わる季節。

翔は昌也に誘われ、見知らぬ場所をひたすら歩いていた。

「なにっ！？ それで抱きしめられずに帰ったのか……」

「……うるせえなあ」

「つたく、情けねえ。そこは抱きしめるだろ絶対に……」

どうやらデートの出来事を話しているようだ。

「……それより、何処に向かってんだよ？」

「んっ、靖国神社だ」

「神社だと！？ ……俺は用がねえから帰るぞ」

「まー付き合えよ、参拝するだけだからさ」

「参拝？ 近くの神社で済ませればいいだろ」

「この時期は特別なんだよ……」

2人が境内の入口に到着すると、そこには大勢の警察官がいた。

「おい、警察官が入口を固めてるぞ。目的は俺か？」

「……馬鹿。警備に決まってるんだろ」

「な、なんで警察が神社を警備するんだよ？」

「この場所は、今日が一番危険な日だな……」

昌也は説明するのも面倒臭くなったのか、境内へ入って行った。翔は警察を気にするようにチラチラと見ながら昌也の後を追った。

「いやあゝ暑いですね。署長自ら警備に付かなくても……」

「……上からの命令だよ」

司はあからさまに不満な顔をしていた。

翔と昌也は境内のジャリ道を歩いている。すると車道の方から演説が聞こえ2人は振り向いた。

「……の行為に対し、多くの国民やアジアの近隣諸国が……」
選挙カーの上から政治家が汗だくになって話をしている。

「ったく、このくそ暑いのに大声でうるさいんだよ（あれ、どっかで……）」

「うわっ！ー！ こんな所で一郎さんに会えるなんて……」

ぼっちゃりとした体型の63歳。仏頂面からか見た目で損をする事が多いが、この国の将来を本気で考えている最後の大物政治家。苛々している翔とは対照的に、昌也は目を輝かせて一郎を見ている。

「……は？」

「お前の事だから知らないとは思うけど……。一郎さんはなあ……」
政治・経済について熱く語り始めた。

「あ、ああゝ息苦しい……」

暑さに加え、昌也が語る訳の分からない話が翔の脳みそを混乱させた。

ジャリ……ジャリ……。翔は音に気がつき振り向くと、白杖を手にした視覚障害者が向かってくるのが見えた。

「おい昌也、じゃまだから道をあける（むむっ、どっかで見た気が……）」

翔の声に、熱中していた昌也も気づき道をあけた。

「すいません、どうぞ」

「ご親切に、ありがとうございます」

ジャリ……ジャリ……。その視覚障害者はお礼を言って通り過ぎていった。昌也は無言のまま見ている。

「……（あの人、もしかして）」

「気の毒だっと思ったら失礼なのは分かっているけどさ……」

翔は視覚障害者の背中を見つめながら、大変そうだなって表情を

浮かべている。

「……平和で豊かなこの国を……」

「うるせえなあ……まだ話てんのか」

「お前なあ。一郎さんって人はだな……」

話が振り出しに戻ってしまった。翔は両耳を塞ぎ、神社の方向へ歩き始めた。

神社に近づくと、大慌てでウロチヨロウロチヨロしている巫女がいた。

「ああーどうしましょう。よそ様の所は使い勝手が解かりませんわ」

「おっ！！ 巫女がいるぞ」

「神社なんだから当たり前だろ……」

「あーはいはい。さっさと参拝終わらせようぜ」

2人は神社へと消えて行った。

第21話 靖国神社　リジューム

——中央区：リジューム——

銀座NO.1ホステスの美咲が経営する高級クラブである。

42歳。通称“女帝”。絶世の美女であることから、嫉妬したウエヌに呪われたと噂される程である。素性は謎が多い……。

銀座のきらびやかな風景を更に引き立てる豪華な建物は、道行く人の目を引いた。そこへ、演説を終えた一郎が足を運んでいた。

「先生、今日の演説お疲れ様でした」

「ふははは、さすがママ。もう情報が……」

「ふふ。私の知らない情報などありませんわ」

経済界から裏社会まで、美咲の交友関係は広い。

「今日はとても多くの皆様に聞いて頂けた……」

今から演説を始めるかの様に、まだまだこの国は良くなると熱く語り始めた。

「相変わらず真面目で熱い人ね」

「志をかざして……もう20年か」

志や熱い思いだけでは、国を変えることが出来なかった。今、その一つ一つを思い起こし溜め息をついている。

「ふふ。あの頃の先生は可愛かったわ……」

「こ、こら……恥ずかしいからその話はやめてくれ」

議員1年目、駆け出しの頃の自分を思い浮かべ照れている。

「しかし……いつまでもママは美しい、あの頃のままだ」

「ふふ。お上手ですね、先生」

一郎はお世辞ではなく本音でそう言っている。瞳を見つめていると知らぬ間に美咲の魅力に吸い込まれていた。

「先生、そんなに見つめられたら恥ずかしいですわ」

「えっ、あつ……あの、弟さんは元気にしてますか？」

顔を真っ赤にして照れている一郎は、話題を変えようと必死になつていた。

「お蔭様で、その節は……」

美咲は深々と頭を下げた。

「で、では。そろそろ……」

帰ろうとする一郎に美咲が耳打ちをした。

「先生、最近不穏な動きが御座います。ご用心を……」

「ありがとうございます。では……」

一郎はリジュームを後にして、事務所へと帰って行った。

第22話 靖国神社 へ刺客へ

——千代田区：某所——

日付が変わる頃、車を降りた一郎は事務所へ到着していた。ドアを開けると、遅くまで残っていた秘書が出迎えている。

「先生、おかえりなさい」

「ああ、遅くまでご苦労様」

「あの、ご友人の方が奥の部屋でお待ちですが……」

「分かった、ありがとう」

「先生はお茶でよろしいですか？」

「ありがとう。今日は一日疲れたろ、もう帰りなさい」

「あつ、はい……」

一郎と友人の邪魔をしてはいけなないと、秘書は身支度を済ませて帰っていった。

一郎は秘書の姿を見届け入口のドアに鍵をかけた。そして、奥の部屋へと入って行く。中には男が一人、背を向けソファに座っている。一郎は反対側に腰掛けた。

「ご配慮、ありがとうございます」

「……で、用件はなんだね？」

「本日の演説はとても良かった、と伝言を預かっております」

「それはどうも……」

一郎はこの男とは面識がない。しかし、何故ここに居るのかは大体見当がついていた。

「しかしながら、いつまで続けても何も変わりませんよ」

「ふははは、それは最後まで判らんだろ……」

「残念ですが、今日がその最後の日……」

突然、男は隠し持っていた短刀をチラつかせ立ち上がった。

「刺客か……だいたい見当はついているがな。お前さんは“国取り”の手の者だろ？」

「……そこまで分かっているとは、流石だな」

「お前さんごときには殺られんよ……」

「ほざくな老いばれ!!」

一郎は2人の間にある机を咄嗟に蹴った。男は弁慶の泣き所に机があたり、短刀を握ったままうずくまっている。

「悪いがまだ死ぬ訳にはいかんのでな……（【変身：閻魔】）」

「閻魔」 仏教の地獄の主。冥界の王・総司として死者の生前の罪を裁く者。

「能力」 3 m程に巨大化し黒魔術を使う。

一郎の姿は巨大化し【閻魔】に変身した。その姿を見た刺客は、驚愕して短刀を落とした。

「この姿を見たからには死んでもらう……魔道波!!」

一郎の掌から暗黒の波動が解き放たれた。あっけなく刺客の姿は、溶けて消えていった。

第23話 歌舞伎町 〱トレーダー〱

——品川区：某所——

「あん……もう……そう、そっち……」

自宅でトレーディング画面を眺めながら、瞳は呟いていた。

26歳。見識が高く聡明だが、大雑把な一面も持ち合わせている。世界中が不況一色で染められたこの時代。個人投資家として日々画面に向き合う生活を送っていた。

「うん、今日は300万円の利益か……」

世間では耳を疑いたくなるようなお金の動きである。

「……あそこで仕掛けていたらなあ」

一瞬の判断ミスが多額の損失に直結する世界。

「でも、タラレバ言ってちゃ駄目だよ」

……運命と同じように。

「うーん、為替はいいかな（動きがなさそうだし）」

気分転換にと携帯を手に取り夕食の誘いを友人にした。

——新宿区：アルタ——

瞳は、待ち合わせの時刻より少し早めに着てしまい、アルタ前を行き交う大勢の人々を見ていた。

「あの映画良かったよ……香織は泣きすぎだけど」

「だって本当に泣けたんだもん。まこっちゃんだって……」

通りすぎるカップルの会話が聞こえてきた。

「……（デートかあ）」

異性との触れ合いからすっかり遠ざかっていた。

「ごめん。待った？」

「私も今来た所よ……」

恵子が姿を現した。看護学校の時の友人である。2人は高級レストランへと入って行った。

「でも、瞳が看護職から離れるとは以外だったわ」

「……そう？」

「だってあなたは主席で卒業して、あんないい病院に就職したのよ

……」

瞳は優秀な看護師として将来を期待されていた。

「……。でも、恵子が今日お休みで良かったわ」

「タイミングだけはいいのよねー私」

「お仕事は、順調？」

「そうね。色々あったけど順調よ」

友人の幸せそうな表情に笑みを浮かべている。

「今はそのトレーダーって仕事をしているの？」

「うん。仕事って呼べる程の物じゃないけどね」

「難しそうで私には分からないわ……それよりね……」

恵子は最近通い始めたホストの話を始めた。

「そうなんだ。でも、あまり興味がないわ」

「瞳も長い間彼氏いないでしょ。社会勉強だと思って、どう？」

社会勉強だなんて、都合のいい話である。

「（夕食付き合ってくれてるし）……今日だけだからね」

「うん。わかってる」

食事を終えた2人は、歌舞伎町へと向かった。

第24話 歌舞伎町 〱デュアルコア〱

——新宿区：デュアルコア——

歌舞伎町No.1の麗が所属しているホストクラブである。

28歳。“孤高の剣豪”の異名を持つ。冷静沈着で優しい心の持ち主だが、野望を成し遂げる為なら手段を選ばないという一面も。それには、生い立ちが関係しているようなのだが……。

接客中の麗にホストが耳打ちをしている。

「美雪さんが見えです」

うなずく麗。もうすでに10名以上の指名客が来店していた。

「申し訳ありません静香さん。指名が入ったようなので……」

「ええーもういつちやうの？」

「すぐに戻って来ますよ……」

麗は甘いマスクで微笑み、その卓を離れて行った。

「どうも初めまして静香さん!!」

指名者が卓を離れると、ヘルプがその卓を受け持ち盛り上げる。

「初めてじゃないでしょ、あなた……」

「あははは、ばれました……」

「やっぱり高いお酒でも入れないと長くてくれないのかしら……」

そんな時、店内に響き渡るようにマイクパフォーマンスが入った。

「8番テーブルのお客様より、ドンペリ・プラチナ頂きましたー!

」

「ありがとうございますーす!!」

「ホスト……集合!!」

合図と同時に店内のホスト達が8番テーブルを囲みパフォーマンスが始まった。シャンパンなどを注文するところだったサービスが受けられる。

その頃、瞳と恵子はデュアルコアに到着していた。

「いらつしゃいませ恵子さん!!」

ホストに名前を覚えられる程、恵子はこの店に通っていた。

「お隣の方はご友人ですか？」

「初めてなの。S券で入れるかしら？」

「もちろん大丈夫ですよ」

2人は席へと案内された。店内は薄暗いが高級感が味わえる豪華な造りになっている。まもなくして、恵子ご指名のホストが現れた。
「恵子さんいらつしゃい!! お友達の方初めまして達也です!!」
異様にテンションが高い。瞳は軽く会釈をした。指名者がいない瞳のようなフリーのお客に対しては、まだ駆け出しのホストや指名を取れないホストから接客をするのが通常である。

「ねえ達也。麗さんをここに呼べないの？」

「えっ!! (NO・1ホストがS券に来る訳ないだろ)」

「私の友達なの、美人でしょ。楽しませてあげたいのよ……」

「……無理だよ」

「またそー言つて、麗さん呼べないんでしょう？」

「……(当たり前だ!!)」

2人の会話を聞き入っているだけの瞳。

その時だった、瞳達の卓の前を偶然にも麗が通り過ぎた。

「あつ、麗さん!!」

恵子の呼び止める声に麗は立ち止まり振り向いた。

「いらつしゃい。恵子さん」

「あの、友達なんですが……」

麗は恵子の隣に座っている瞳に目を向けた。しばらく無言で見つめ合う2人。

「後で来てもらえませんか？」

「もちろんですよ」

麗は微笑みを残し次の指名客の元へ向かった。

「はあゝ……素敵。指名変えちゃおうかしら？」

「おいおい。俺は心臓がバクバクしてたぞ……」

「あの人……（とても哀しい目をしてた）」

営業時間も終わりに近づき、へべレケな達也と恵子。代わる代わるホスト達は来るものの、麗の姿は無かった。麗の存在・瞳の存在も忘れてしまい、達也と恵子は2人で何処かへ行ってしまった。

「あーあ、私も帰ろう……」

取り残された瞳は、1人店を後にした。

第25話 歌舞伎町 ー一番街ー

——新宿区：一番街——

午前4時前後、歌舞伎町が最も危険な時間帯を迎える。

始発待ちをしている一般人の酔っ払い・お茶引きホスト達のキャッチ、麻薬の密売人・付随したチンピラ、ゴロツキ達。そして何よりも最も危険な繁華街、眠らない街：歌舞伎町。その元締め組員達がうごめいている。

そんな凶悪な輩達を相手に、常に目を光らせている歌舞伎町交番の精鋭警察官。まさに一触即発のピークを迎える時間帯に、瞳は何も知らずに一番街を歩いていた。

「まだ、時間早いけど始発動いてるかな」

コマ劇付近に差し掛かった時だった。案の定、ゴロツキ達に取り囲まれる。

「……（ちょ、ちょっと何？）」

それを見ていた組員達がニタニタしながら近寄ってきた。すぐにゴロツキ達は逃げ去る。弱肉強食の世界。

「ほおーこりや上玉だな」

瞳を囲む組員達の元に車がまわされ、連れ去られる瞬間だった。

「俺の連れだが……何か？」

そこには麗の姿があった。

「なんだあー……へっ、ホストかよ。ホストごときが首を突っ込むんじゃないえー！」

麗は3人の組員に囲まれている。

「お前ら【侠狼会】の者か？」

「知っているなら話は早え……判るよな？」

「麗さん……」

瞳の弦きを聞いた他の組員が叫んだ。

「麗だと！？……お前ら手を出すな！！」

時既に遅し、3人は地べたに転がっていた。

「ちっ……女は返せばいいんだろ。行くぞ！！」

【狭狼会】の連中は車に乗り込み、逃げるように去って行った。

麗は瞳の元へ優しい笑顔で歩み寄った。

「あの……ありがとうございます。ご迷惑をお掛け致しました……」

「とんでもありません、私の方こそ約束を守れなくて申し訳なかった……」

麗は卓に来说と言った約束を守れなかった事を詫びている。

「よろしければ、始発までお話しませんか？」

投資家とホスト。畑は違えど、己の裁量のみで生きる共通点に瞳は心を開き始めた。

「……はい」

2人は朝靄のかかる場所へと姿を消した。

第26話 刺青 く俠狼会

——板橋区：俠狼会事務所——

今は亡き、初代俠狼会・会長。名立たる勢力を駆逐し、至弱から至強の組織へと導いた偉大なる人物。その血を受け継ぐ重慶、若干28歳。現在は父親である3代目会長が君臨しているが、とにかくこの親子……とても仲が悪い。

俠狼会・若頭で義侠心の強い人物。大胆な性格からか、度々周囲を困らせる事がある。信念が強く、極道の真髓を常に探求している。また、世話好きという似つかない一面も。翔とは古くからの顔見知りのようなのだが……。

ある日、重慶は大きなソファーに腰掛けていた。両腕と腰元に裸の妾を侍らせ、快楽に浸っている。そんな最中である、部屋の扉が開き若い衆が入って来た。

「若頭、本隊の奴らが『麗』とトラブルになったとの情報が……」

「……“孤高の剣豪”か？」

「はい、出勤命令が出ておりますが……」

「放っておけ……」
「たたく、自分のケツぐらい自分で何とかしろってんだ……！」

怒気を含んだ言葉に、腰元の妾がビクつと反応した。

「おつ、すまねえ驚かせたな。続けてくれ……」

妾の背筋を撫でながら目を瞑り、再び快楽に浸っている。

「それよりも、亜門会の動きは掴めたのか？」

重慶の問いが聞こえたのか、部屋の扉が開き1人の男が入ってきた。

「それは私からお話しましょう」

「李伯か……『翔』の件はご苦労だったな」

「いえ、これで本隊も簡単には手を出せないでしょう」

「あいつとの決着は俺が着けるんだからよ……」

目を見開き、不敵な笑みを浮かべている。

「若、亜門会についてですが……この1年足らずで急速に成長しております」

「資金源でも確保したのか？」

「詳細は掴めませんでした、何者かが後ろ盾している事は確かです……」

「麻薬の売買までは目を瞑ってやるつもりだったが……」

急速に勢力を拡大させている亜門会。特に敵対的關係でもなく、度々侠狼会の島に姿を現していた。しかし、人身売買にまで手を染めた輩に、道無きと判断した重慶の怒りを買ってしまった。

「決行日は今夜だ。あいつらにもそう伝えておけ……」

「……わかりました」

李伯と若い衆は部屋を後にした。

第27話 刺青 〱極道〱

——板橋区：亜門会・布佐の屋敷——

広大な中庭を有し、古びてはいるが屋敷の大きさは豪邸を連想させる。部屋でくつろいでいる布佐の元に、侵入者の報告が入ったのは日が沈んだ頃だった。

「会長、“傭兵”が侵入者を捕らえました!!」

報告を届けに組員が部屋に駆け込んだ。まもなくして、犯人が連行されてきた。両手を後ろに縛られ猿轡を噛まされている黒装束の女。続いて直人が部屋に入った。

「んゝ女か？ まさか本物の忍者ってことはないよな……」

女の出で立ちに布佐は驚いた表情をしながら歩み寄った。そして、自ら顎を掴んで顔を持ち上げ、耳元で囁く。

「お前も運が無い、直人がいる日に進入してくるとは……」

「用件は済んだな。帰るぞ……」

「ご苦勞様。『清』さんによりしく伝えてくれ……お前達、お見送りだ!!」

組員達に直人を見送らせ、布佐は部屋に鍵をかけた。そして、捕らえた女を大の字にして机に縛り付けた。

「さてお嬢さん、コスプレなのか、それとも本物のくノ一なのか……」

……

歩きながら布佐は話している。そして、奥から箱を持ち出し卑猥な玩具をちらつかせた。

「じつくりと体に聞いてみるとしよう……」

布佐は服を引き裂き、露になったそれ達に刺激を加える。微動だにしない女の姿を見て頬が緩んだ。くノ一とは、幼少の頃からこのような訓練を受けていると伝えられている。

「本物に出会えるとは光栄だ。……で誰からの依頼かね？」

女は無言のまま目を閉じている。

「……では、言いやすくしてあげようじゃないか」

布佐は金庫から持ち出してきた注射器を女に見せている。中には薬物らしき液体が入っているのが見て取れた。

「素直な自分に戻してあげるよ……」

「……そろそろかな」

虚ろな目をしている女。膨張している2つの山の頂上を、布佐はやさしく摘んだ。全身に迸る快感に、女は目を見開いた。

「うっ！！」

その反応に、布佐は満面の笑みを浮かべていた。口では尋問を続け、手にした玩具で全身の反応を確かめている。女は必死に逃れようとするが、仰け反る体勢が精一杯であった。

「んん、どうなんだ。そろそろ言いたくなってきたのか？」

女の喘ぎ声が鳴り止まない。そんな悪趣味が続く中、凄まじい爆発音が聞こえ布佐は手を止めた。

「何事だっ！！」

布佐の叫び声に、扉の向こう側から組員の報告が入った。

「狭狼会の襲撃です！！」

「ちっ、取り合えず応戦しろ！！それと直人を呼び戻すんだ……」

布佐の屋敷、敷地の正面入口。

頑丈そうな鉄門に狭狼会がバズーカー砲を打ち込んでいる。

「はっはぁー、どんどんぶち込め！！」

重慶は爆発音の度に歪んでいく鉄門を見ながら、血をたぎらせている。

「門が開いたぞ！！」

「突撃！！」

李伯の開門を告げる声を聞き、重慶は一人で突っ込んで行ってし

まった。

「あー若頭!!」

いつもの事ながら無鉄砲な重慶の突撃に組員は手を焼いていた。しかしながら流石である、一同はその行動に呼応する。

広大な中庭で待ち構えていた亜門会と銃撃戦が始まった。目の前の敵を次々と撃ち倒し、重慶と数名が屋敷に辿り着く。中へ突入すると、外とは別世界の静寂に包まれていた。重慶は布佐の名を叫ぶが、声だけが木霊した。

「出てこないんじゃないしょうがねえ……」

重慶は懷からマグナム・ウルフを取り出した。そして、吹き抜ける空間へ向けて構える。

「頼んだぜ……（【操術：送り狼】）」

「送り狼」 狼の妖怪。山道を歩くと後ろからぴたりとついてきて、転んでしまうとたちまち食い殺されると伝えられている。

「能力」 送り狼を召喚して操る。得物に送り狼を宿して戦う。

【妖怪：送り狼】が姿を現し放たれた銃弾に宿った。意志があるかのように、目標へ向かって飛んで行く。重慶は導かれるように後を追った。辿り着いた先は2階の部屋だった。扉を蹴り壊し、中へ入って行く。

「見いゝつけた……」

布佐は咄嗟に銃を構えようとするが、それより先にマグナム・ウルフが額を打ち抜いていた。一段落していると、ふと視線を感じ振り向いた。

「……何だこの裸のねーちゃんは？（!! この刺青は……）」

女の左胸にある刺青を見た重慶は、すぐにこの女を解放するよう伝えた。解放された女は一瞬にして姿を消した。

「き、消えた!! 若頭、誰なんですか？」

重慶は無言のまま立ち尽くしていると、奥の部屋から気配を感じ歩き出した。扉を開けると、その部屋には数十人の女がいた。全員

が裸で酷く怯えている。

「とんだ悪趣味ですね……」

背後には李伯が立っていた。亜門会を掃討し終えたようだ。この部屋には、隅々にまで卑猥な玩具が置かれていた。すると突然、重慶が語り始めた。

「俺達は世間の邪魔者だ……どんな行いをしようと決して受け入れられる事の無い十字架を背負っている。だが……己の道を貫き極める者だからこそ、俺達は極道と呼ばれる。帰る場所がある者は去れ、無い者は面倒を見てやるからついて来い!!」

怯えていた女達は、一斉に安堵の表情を浮かべた。

「この腐った屋敷は今すぐ焼き払う。急いで全員屋敷から出る!!」

屋敷に火が放たれ、中庭から一同はその様子を眺めていた。しばらくすると、女達が騒いでいるのに気づき組員が事情を聞いていた。「若頭、4歳の子供がまだ屋敷の中にいるとの事で……」
重慶に報告しにきた組員の話聞いた李伯が、女達に聞いた。ただした。

「何だと!? 何故一緒に連れ出さなかったんだ?」

「布佐に見つからないように隠し部屋に避難させていました……重慶様のお言葉の後に迎えに行ったのですが、そこにはすでに……零ちゃん私達の宝なんです」

重慶は炎に包まれる屋敷へ無言のまま入って行ってしまった。

「あつ!! お前らすぐに火を消せ!!」

屋敷内に突入した重慶の姿を見た組員達は急いで消化活動を始めた。

「くつ、火事で死ぬ奴の気持ち少し分かった気がするぜ……。これで、その娘が居なかったら……ピエロだな」

屋敷内は黒煙と炎に包まれている。予想以上の環境に重慶は戸惑っていた。最悪の事態が過ぎるが、送り狼に娘の居場所を託した。

すると、解き放たれた送り狼が動き始める。最も火の手があがっている部屋へ向かって行った。

「生きているんだろうな……」

扉を蹴り破ると幼い少女が倒れていた。すぐに抱きかかえ、意識を確認する。

「よし、なんとか生きている。後は脱出だが……」

燃え盛る炎と黒煙で方向すらつかめない状況となっていた。その瞬間、部屋の天井が崩れ落ち2人を覆い隠した。

「まだかつ!!」

いつこうに進まない消火活動に李伯は苛立っていた。

「まずいな。時間的に見ても厳しいか……」

重慶が屋敷に入ってから10分程の時間が経っていた。呆然と燃え盛る屋敷を見上げていると、女達が騒ぎ始めている。目を向けると、全身炎に包まれた3人の姿が見えた。女達は一生懸命に火を消している。李伯もすぐに駆け寄り手を貸した。覆いつくしていた火を何とか消し終えたが、ぐったりしている3人。意識が全く無い状態だ。

「（この女は……）すぐに『学』先生の元に連れて行くぞ!!」

重体の3人を急いで車に担ぎこみ、女達を乗せた数十台の車は燃え盛る布佐の屋敷を後にした。

第28話 刺青く少女く

——江東区：診療所——

規模こそ小さいが、庭付き平屋建ての建物がそこにはあった。どうみても、診療所とは見られない平凡な家である。しかし、姿を晦ますのには最適だった。その一室に大火傷を負った2人は寝かされている。

布佐の屋敷、襲撃事件から4日目。重慶は目を覚ました。

「……若頭が目覚めたぞおー!!」

余りの嬉しさに組員達は大騒ぎしている。

「うるさいですよ。少し静かにしてなさい……学先生を……」

傍らに座っていた李伯も安堵の表情を浮かべている。間もなくして、学と呼ばれている白衣を着た男が姿を現した。

54歳。穏やかな性格で心有る人物。細身の白髪交じりで丸眼鏡かけている。死者をも蘇らせたと噂されるほど優秀な医者だったが、ある事件をきっかけに免許を剥奪され追われる身となってしまう。その後、闇医者として活動するのだが……。

「気分はどうですか？」

「……（助かったんだな）」

重慶は天井を見つめながら記憶を辿っていた。

「安心して下さい、少女の火傷は軽症です。きっとあなたが守っていたからでしょう……」

学は小さな庭で女達と無邪気に遊んでいる雫を見て話していた。

「ぐっ……」

重慶は起き上がろうとするが体が動かない。

「まだ無理ですよ。あなたが一番重症なんですから……」

重慶はふと隣を見るとまだ女が眠っていた。学と2人で話をする為、他の者達を部屋から出るように伝える。

「先生、その女の刺青を見ましたか？ 正直、俺はそれを見た時ゾツとしましたよ……」

「……私もです」

「ずっと架空の組織だと思っていました……」

「相当な大物が絡んでいるようですね」

世の中には、絶対に表に出してはいけない情報が存在する。その情報のみを取り扱う闇の諜報会社の存在が、裏の世界では噂されていた。過去に一度だけだが、裏社会にその機密情報と思われる物が流出した事があった。当時は何者かの悪戯と思われるに違いない。そして、その情報の一つに爵位を意味しているかのような印の序列があった事を、重慶は思い出していた。

そして、女に刻まれた刺青はそれを意味しており、しかも組織最高の実力者に刻まれる印であった。

「その女が布佐ごときを調べに来たとは考えづらい」

「おそらくあの娘が目的だったのでしょう」

「だが、その女は捕らえられていた……俺達が乗り込む前に誰かいたはずだ」

布佐を後ろ盾した黒幕の存在。最高実力者が動く程、重大な意味を持つ謎の少女。

「俺の頭じゃ無理だ。段々眠くなってきたな……」

「今は体のことだけを考えて下さい」

「とりあえず、その女が目覚めたら教えて下さい」

重慶は再び眠りに着いた。

——2日後。

驚異的な回復力で、重慶は起き上がるくらい出来るようになっていた。

「若、若。お休みの所すいません」

「……ん、何だ？」

昼まで目覚めない重慶を、李伯はそつと起こした。

「あの女が消えました……」

隣を振り向くと、寝たきりだった女の姿がそこにはなかった。そんなにすぐに動けるものかと、重慶は驚きの表情をしていた。しかし、すぐに少女の事を思い出した。

「……娘は？」

「おりますが……何か？」

「……（最重要目的の娘を置いたまま消えただと？）」

「あの女、寝た振りをして体力が全快するのを待っていたんでしょね……」

「先生はどうした？」

「今朝早くから例の件で……」

学は月に数日、ある約束を守る為に診療所を留守にする事がある。

「それと娘のことについて女達から聞いた事です……」

「……なんだ？」

「出会った時から、耳が聞こえていない様子らしいとの事で……」

「話すこともできない……か」

雫から何らかの情報を得ようと考えていたが、情報源を絶たれた。

……ガチャ。雫と不安な表情を浮かべている女達が部屋に入ってきた。

「あ、あの、お体が大分良くなったと聞きましたので……」

恐る恐る話し始める。

「お前達……雫は好きか？」

一斉に頷いた。

「雫をここへ……」

李伯はベットに雫を連れてきた。女達は心配そうに見守っている。俺の声が聞こえるか？」

重慶は目を見て話しかけるが、雫はキョトンとした表情で見上げている。その様子を見ていた重慶は、突然大きな両腕を広げ雫を抱

きしめた。

「お前は俺の娘だ!!」

おそらく言葉は聞こえていないだろう。だが、そのやさしい温もりに雫は微笑んだ。

「さて……帰るぞ!!」

雫を抱きかかえたまま立ち上がった。女達は不安そうな表情で重慶を見ている。

「お前達、雫の世話は任せるぞ……」

歡喜に沸く女達を連れ、重慶は診療所を後にした。

第29話 奇怪な出来事 女の戦い

——渋谷区：八チ公前——

曇り空の午後、香織は大慌てで待ち合わせ場所に向かっていた。約束の場所でたたずんでいる凜の姿を発見すると、その速度は光と化した。

「遅くなつて、ごめんなさい！！ お、お爺ちゃんに邪魔されて……」

お洒落をしている姿を見られ、爺の突っ込みが激しかった話をしている。それを聞いている凜は笑っていた。

「初めて来たけど、とても分かりやすかったよ……」

八チ公を見上げている凜は笑顔だ。

「そうでしょ。渋谷と言ったら、やっぱりここよね」

2人はスクランブル交差点を渡り、楽しそうに109へと歩いて行った。

——渋谷区：センター街——

数十年前はチーマーの聖地として知られていたセンター街。だが、ここ数年はコギャルに汚ギャル、センターGUYやギャル男にチャラ男など、世にも奇妙な動物園と変貌を遂げていた。芸能スカウトなども多数混在しており、世間知らずのお人好しが後を絶たない。そして、それをカモにする悪徳者達が巢食っていた。

そんな去年の事である。夏希と名乗る当時16歳の少女が姿を現した。彼女は瞬く間にこの街を支配し、従わぬ者は容赦なく追放した。

程好く買い物を買ませた凜と香織は、お食事処を求めセンター街へと向かった。日が沈み始めた夕暮れ時である。しばらく歩いてみると、ギャル男やらスカウト達の目に留まる。

「ねえーねえーお姉ちゃん達……今暇してなくなかない？」

「いいよおー、綺麗だ。光り輝く原石だね、芸能界とかがって興味ある？」

しつこく付きまとわれるが、すべて無視して歩いている。その後も、ひっきりなしに声を掛けられた。ふと気づくと、ひと気の無い場所まで歩いてしまっていた。

「……凄かったね」

「うん、もううんざり。はぁーお腹空いた……あれ、ここ何処!？」

香織は不安な表情をして辺りを見回している。見知らぬ場所に来てしまったようだ。来た道を戻ろうと、歩き出した時だった。どこか身近な場所と思われるが、叫び声のような騒がしい声が聞こえてきた。

「悲鳴!？ ……やだ、何？」

「……行ってみよう」

香織は気味が悪い表情を浮かべている。凜は声のする方向へと走り出した。

広い更地へと辿り着き、異様な光景を目の当たりにする。宙を舞っている女を目掛け、数十人の男が石やら何やらと物を投げつけている。そして、数人だが倒れている男の姿も見えた。

仲裁に向かおうと走り出す2人。すると男達は呻き声をあげながら香織に襲い掛かってきた。

「ちょ、ちょっと……!!」

凜は香織の救出に向かおうとすると、妙な気配を感じ立ち止まった。目の前をすさまじい風が通りすぎるのを感じ、宙に浮いている女を見上げた。

「いい勘してるじゃない……これ以上、邪魔立てすると容赦しない

わよ」

女は凜を見下している。

「凜さん！！ こっちは大丈夫だからその女を……」

香織は手当たり次第に周りの男達をぶっ飛ばしながら叫んでいる。

「火鳥扇！！」

火炎の扇が女へ向かう。

「鎌鼬！！」

火炎の扇が真つ二つに切り裂かれた。凜は驚いた表情で女を見上げ、身構えている。女の正体は、洋子であった。

「どうしても邪魔をするというのね……死んでもらうわよ！！」

洋子は目を見開き、鎌鼬を連発している。凜は辛うじて避けながら反撃を試みるが、上空にいる敵に成す術が無かった。その様子を見ていた香織が、援護に向かおうとした時だった。

「お前達、その3人を逃がすなよ！！」

男達に囲まれて姿が見えなかったのか、突如聞こえた女の声に香織は驚いた表情で振り返った。そこに居たのは、この街を支配している夏希だった。

冷酷で手下を下僕のように扱い、歯向かう者は有無を言わず街から追放した。徒党を組み帝国さながらの集団を築くには、ある理由があつた……。

「何あの子……コギャル？」

数十人の男達は一斉に3人に向かって走り出した時だった、下から突き上げるような大きな揺れが一同を襲う。余りの揺れの大きさに、地上にいる全員が地面に手をついた。

「じ、地震！？」

香織が叫んだ。しゃがみ込み、揺れが収まるのを待っている。

「ふふっ……そのまま動くんじゃないよ」

身動きが取れない連中に、洋子が襲いかかるうとしている。すると地響きが止み、地面が裂けるように割れ、そこから巨大なゴーレ

ムが姿を現した。その姿を見た一同は啞然としている。

「ゴーレム」 ユダヤ教の伝承に登場する自分で動く泥人形。

「グガゴ……ゴゴ……」

ゴーレムは唸り声をあげている。

「……（標的は誰？）」

夏希はゴーレムを眺めながら考えていると、洋子が仕掛けた。

「鎌鼬！！」

凄まじい風に乗った刃がゴーレムを襲った。だが、うつすらとした痕跡が残っただけだった。

ゴーレムは大きな手で土を掴み、宙にいる洋子目掛けて投げつけた。土の礫をまともに喰らった洋子は落下した。ゴーレムはゆっくりと洋子へ近づいて行く。

「ちよつと、助けなきゃ！！」

凜と香織がゴーレム立ち向かっていった。

「（【体技：聖拳】）二段突！！」

「能力」 急所を見極め、致命的な一撃を狙う。幼少の頃より叩き込まれた、老師直伝の変則空手である。

「火鳥扇！！」

香織の打撃、凜の火撃をもろに受けるが全く怯まない。ゴーレムは両腕を出鱈目に振り回し2人を弾き飛ばした。倒れ込む凜と香織だが、その一瞬の時間稼ぎのお陰で、洋子は振り下ろされる拳を間一髪で避け、再び宙へ浮かんだ。

「……（操っている何者かが近くにいます、どこ？）」

夏希は辺りを見回していると、ゴーレムは察知したかのように突進してきた。その隙に、洋子は姿を晦ました。

「うつ、お前達がかれ！！」

夏希の号令と共に一斉に襲い掛かる男達。しかし、あっけなく倒されゴーレムが素早い動きで襲ってきた。

「きゃあ!」

かろうじて逃げるが徐々に追い詰められていく。凜と香織は動けないままだった。

第30話 奇怪な出来事 ー黄金の右腕ー

――渋谷区：某所――

夏希はいつの間にか袋小路に追い詰められていた。背後にはフェンス、目の前にはゴーレムがゆっくりと近づいて来ている。何やら覚悟を決めたのか、右手を上げ振り下ろそうとした時だった。

「呼んだかね？」

突然、頭上から聞こえた声に動きが止まる。恐る恐る振り返りフェンスの上を見上げると、背を向け仁王立ちしている何者かの姿があった。

「なんだコイツは!？」

夏希は嫌なアングルからその姿を見ているせいか、さっぱり訳が分からなくなっていた。

「……（あれ、どこかで見たような……）」

香織は立ち上がり、その姿を見て何かを思い出そうとしている。

「パンダマン!!」

凜は何故か嬉しそうに見ている。するとパンダマンが振り向きながら語り始めた。

「俺の名は“パンダマン”。平和とパンダをこよなく愛する……ぐわっ（最後まで聞けよ!!）」

ゴーレムの一撃を喰らいパンダマンはフェンスからぶっ飛んでいった。

「えー!!……だ、大丈夫なの?」

香織は飛ばされたパンダマンの姿を見て驚いている。状況は何も変わらず、夏希のピンチは続く。ゴーレムの振り上げた腕が襲ってきた。

「ぬんっ!!（なんてパワーだ）……早く……逃げろ」

パンダマンは鬼熊に変身し両腕で受け止めていた。ゴーレムのパ

ワーに全身がプルプルと震えている。夏希は咄嗟に逃げ出した。

「ぐがぁー!!」

叫び声と同時に、パンダマンはゴーレムの腕を弾き返した。

パンダマンとゴーレムの一身一体の攻防が続いている。見ている3人は各々考え事をしていた。

香織はそんなに遠い距離ではないし、『誠』を呼ぶか迷っている。夏希はパンダマンでは勝てないと思い、『麗』に連絡しようか迷っている。凜は先程から洋子の姿が見えない事に気づいた。

そんな3人を他所に、生身であるパンダマンに疲れの色が見え始めていた。

……ドウルルルルル。すると突然、更地に面した道路からエンジン切る音が聞こえた。道路には1台のトラックが停車している。

「……（吾駒運送!!）」

香織はトラックに書かれている会社名を見て目を見開いた。以前、『誠』から聞いたトラック運転手の話を思い出したからだ。トラックから降りてきた男は、一直線にゴーレムに向かっている。その姿を3人は無言のまま見つめていた。

「（【潜在：シヴァ】）……（唸れ黄金の右腕）」

「シヴァ」インド神話の破壊を司る神。

「能力」右腕のみに破壊的な力が宿る。黄金の右腕と恐れられている。

戦闘中にも係わらず、背後からの只ならぬ圧力を感じたパンダマンは思わず振り返った。パンダマンを通り過ぎ、煌々と輝いている右腕を振りぬいた。男の一撃にゴーレムは跡形も無く砕け散った。啞然とするその場にいる者達。

張り詰めた静けさの中、男は3人に振り向いた。

「化け物は退治した。もう大丈夫だ、安心しなお嬢ちゃん達……」

3人はあんたが化け物だよっと言いたげな表情をしている。無視されたパンダマンは男に対して身構えていた。

「じゃーな。パンダマン……」

男はトラックに向かって歩きながらパンダマンに声を掛けた。そして、何事も無かったかのように去って行った。

走り去るトラックを見つめ、立ち尽くしているパンダマンに凜と香織が歩み寄った。

「ありがとう。パンダマン」

「……ああ、いつぞやのお嬢さんですね」

「あ、あの、パンダマンさん。あの人とはお知り合いですか？」

香織はトラック運転手の正体を確かめようと、勇気を振り絞って訪ねた。

「本物かどうかは判りませんが、『一鉄』かも……いや、きっと本人だろう……」

実際にパンダマンも一鉄とは面識がない。何故自分の事を知っているのか不思議でならなかった。

「……（まこっちゃんが出会ったおじさんって……）」

「……（あれが最強伝説の男！！）」

夏希は会話を聞いていたのか、男の正体を知り何やら考えていた。

——翌日。

香織は、昨日の出来事から色々調べて貰おうと、従兄弟の涼に電話をしている。

「もしもし、涼君」

「ゴーレム……ですか？」

涼は鎌鼬の事件を思い浮かべ不吉な予感を抱いていた。

「最近になって奇怪な事件が多発しているみたいですので、気をつけて下さいね」

「えっ、奇怪な事件って……」

とりあえず調べると言い残し、涼は電話を切った。

第31話 縁結び 〜巫女〜

——練馬区：Bar Change——

翔はBar Changeを訪れていた。カウンター席に座り、終始ニタニタしながら忙しそうに働いている径子を見ている。そして、径子が通りかかった時に声を掛けた。

「……おい。何かいい事でもあっただろ？」

翔の問いかけに微笑みだけを残し、径子は何も言わず立ち去って行った。その態度にやはり何かあったと確信した翔は、カウンターでシェイカーを振っている昌也を見た。

「あー昌也！！ 何か隠してるだろ？」

「は？ 隠すって、何をだよ……」

翔は径子を指差した。

「見るよあの顔。笑顔を通り越して気持ち悪いーぞ！！ 親友として隠し事は良くないと思うぞ……」

「別に隠しごとじゃないけどよ……」

この前のデートで、縁結びで有名な巫女に会いに行った事を話した。

「へっ……それだけ？」

「ああ、それだけだ。わざわざ伝えることじゃないだろ」

昌也はグラスにカクテルを注いでいる。

「本当か？ その後2人でイチヤイチャしてたんじゃない？」

勝手な想像を膨らまし、1人興奮している。

「それはいつもだ。問題ない……」

昌也は誇らしげに言い切った。翔は羨ましい様な悔しい様な表情を浮かべていた。

「でもちよっと喜びすぎじゃねーか？」

「女性にとって好きな人と縁結びが出来たって事はだな……」

縁結びについて話し始めた。翔はぽかんとした表情をしている。

「まったく……お前も同じ気持ちにさせてやるつか？」

「は？」

昌也は急にニタニタした表情で翔を見た。

「もしも、『凜』ちゃんと縁結びしてもらえたらどーよ……」

「……ぐうおおーああー！」

突拍子もない雄叫びに、ビクつとする店内の従業員と客。

「お、おい落ち着け。例えばの話だ……」

妄想して興奮状態の翔を必死でなだめている。

「……で、それはどこにあるんだ？」

「え、えくとだな……」

翔のギラついた目に押され、昌也はしょうがなく場所と神社の名前を伝えた。

「なあ翔、まだそこは早すぎるんじゃない……」

翔は話を無視してあつという間に飛び出して行った。

「あつ翔さん、御代……」

——品川区：某所——

瞳はトレーディングを終え、ティータイムを満喫していた。手にしていたファッション雑誌を眺めると、広告欄に目が止まった。

そして、自然と携帯に手が伸びている。

「お久しぶりね……」

「やあ瞳さん。トレードは順調ですか？」

「そうね順調よ。今度顔出しに行こうと思っているんだけど……」

「ありがとうございます。楽しみにしていますよ」

電話の相手は麗だった。意気投合したあの日以来、お互いを認め合いながらも日々の生活に忙殺され、すれ違いが続いていた。

「それよりね、縁結びで有名な巫女の話って知ってる？」

「ええ、知ってますよ……（先週行った妖気を感じる巫女の事かな？）」

「ねえ、それでね……あのね……」

電話越しだが、自分から誘う事を躊躇している様子が窺えた。麗は女心を察し口を開く。

「一緒に行きましょう。いつ、お時間とれるんですか？」

「え、え」と……」

2人の恋が、再び動き出そうとしていた。

——文京区：音郷道場——

自分の部屋で、ゴロゴロしながら暇を持て余している香織。ふと携帯が目に入った。

「あつもしもし、凜さん……」

渋谷に買い物に行った時の話に始まり、先日『誠』とのデートで縁結びをしてきた話をしている。

「いいなあ、香織ちゃん」

「あれ！？ 凜さんって、いい人いないんですか？」

「うゝん……」

凜の脳裏に『翔』が一瞬よぎった。

「ああーやっぱりいるんですね。凜さん綺麗だし可愛いもん」

「え、えつ……いないよ」

「あーはいはい、わかりましたあゝ」

香織はそう言いながら、神社の場所を教えている。

「だから本当にいないんだって……」

「一応ですよ一応。今後の為にね……」

その後も、2人の楽しい時間は続いていた。

第32話 縁結び く九尾の狐

——荒川区：尾日神社——

月夜の晩、神社の離れにある古びた風呂場で入浴中の巫女。名前は結衣、19歳。ここ尾日神社の神主の娘である。

おっとりとした性格で、相手に癒しを与える。仕来たりを忠実に守ることから、日々入浴を覗かれる悲劇に付き纏われている。

「……（もおくまた覗かれてる……）」

神聖な大木から造られたと伝えられている風呂場は、建て替えることは勿論、隙間を修理する事すら許されていない。そんな事情を知ってか知らぬか、風呂場を囲むように覗き魔が出没する日々が続いていた。

「（しょうがない人達だなあ）お仕置きですよ……（【操術：九尾の狐】）」

く九尾の狐く 三大悪妖怪に数えられる狐の妖怪。9本の尻尾をもち、万単位の年月を生きた古狐が化生したものだと言われている。

「能力」 九尾の狐を召喚して操る。地上戦、空中戦での戦闘が可能。

「うわぁー！！……ひいー！！」

風呂場の外に九尾の狐を出現させ、驚かせて追い払う日々。今日こそはと、着衣を済ませた結衣は、父親の元へ向かった。

「ねえお父さん。お風呂場どうにかなりませんか？」

結衣は迷惑顔で父親に話をしている。

「結衣、昔から言っているが……」

あの風呂場は神聖なる場所で、代々聖女しか利用がゆるされない仕来たりを伝える。その話を何度も聞かされて育った結衣はうんざりしていた。

「もう、いいです。私に何かあっても知りませんからね……」

「ははは、大丈夫だよ。その為に九尾の狐がいるんじゃないか……」
拗ねた面持ちで話している結衣に、父親はあっけらかんと話をした。

「……じゃー以前行った靖国神社のお手伝いは大丈夫なの？」

「あれも代々の行いだから大丈夫だよ」

この家の代々の仕来たりだと結衣は諦めたようだ。

「おやすみなさい」

「はい、おやすみ」

第33話 傭兵 く亀柴商事く

——豊島区：西口公園——

——5年前に遡る。

サンシャインを象徴とする都内有数の賑やかな街、池袋。昼間は多くの人々が集い活気に溢れているが、ネオンが灯り始める頃になるとある集団が姿を現す。そう、ここを聖地と崇めるギャング達である。常に争いが絶えず、数ある集団の中からアッシュとロデオの2大勢力が生き残り、一触即発の状態が続いていた。

そんな時代の真っ只中に、20歳を迎えた直人の姿があった。この男、能天気で無類の女好きだが、仕事に関しては恐ろしく真面目である。

夜空には満月が光り輝き、いつものように園内をふらふらと歩き回りながらターゲットを探していた。

「やっぱりここにいたよ。……あの女好きは病気だな」

直人は園内を行き交う女性に、片っ端から声をかけている。その姿を遠目に見ているアッシュのメンバーは呆れた表情をしていた。すると、直人の呼びかけに女性が立ち止まる姿が見えた。

「とてもステキに輝いているお月様だね。けど、君の瞳の輝きには

……」

直人は上空の月を眺め、女性を口説いていた。そして、女性に振り向き決め台詞を放った。しかし、すでにそこには女性の姿は無く、アッシュのメンバーが立っていた。

「うおっ！！……なんでお前達がいるんだよ」

「……またフラれましたね」

ニヤニヤと直人を見ているアッシュのメンバー。

「ふん、なんか用か？……どーせいつもの話だろ」

「お願いしますよ。今夜にでも衝突しそうな雰囲気なんです……」
ロデオとの抗争の際に、何とか力を貸して欲しいと頼み込んでい

る。
「だ・か・ら、俺はどっちにもつかねーから勝手に争ってるよ」

昨日、ロデオのメンバーが誘いに來た事を伝え、アッシュのメンバーにも諦めるように伝えた。

「あつそうだ、お前らのリーダーにも伝えておけ……」

抗争の際に、俺の女達を巻き込んだり手を出したら容赦しない旨を告げた。

「えー！！ 誰が直人さんの女が判りませんよ。…… 無茶苦茶だ」

「バーカ。全ての女に手を出さなきゃいいんだよ」

肩を落とし、アッシュのメンバーは帰って行った。直人も帰ろうと歩き始めた時だった、携帯が鳴っている。

「…… わかった。これから向かう」

—— 豊島区：某所 ——

直人は池袋No.1のキャバクラ嬢である亜紀の家に到着した。
一応、この2人は恋人同士である。

「どうしたんだ急に……」

直人がリビングのソファーに腰掛けるなり、亜紀はアッシュとロデオの争いについて話し始めた。

「最近、客足が悪くて困ってるのよね……」

遠まわしに争いを仲裁して欲しいと聞こえた。直人は両方のリーダーと面識があり、嫌な奴らではない事を知っている。

「まあ信念の違いじゃねーのかな。それはそれで大事な事なんだか……」

すると亜紀は、この抗争と関係があるのか因果関係がはっきりと解らないと前置きをして、気がかりな話を始めた。

「亀柴商事って知ってる？ 最近業績が絶好調でイケイケな……」
直人は経済の話などさっぱりだった。首を横に振り、亜紀の話を聞いている。

「その会社の人達がね最近よく飲みに来てくれてるんだけど……」
「……けど？」

「この豊島区を西の拠点にするって話を聞いてね……」
「……どーゆー意味だ？」

気になった亜紀は、経済に精通している他の客から亀柴商事について聞いた話を話した。

「“国取り”だと？」

「その社長、経済界ではそう呼ばれているんだって」
表向きは財力でこの国を支配しようとしている事、一方裏では多くの傭兵を抱え込んでいるという噂。

「……抗争の裏を引いているって事か？」

亜紀は静かに頷いた。

「情報ありがとよ。ちよっくら行ってくる……」
軽くキスを交わし、直人は家を飛び出した。

第34話 傭兵 〱 国取り〱

——南池袋公園——

日付が変わり、深夜の南池袋公園。アツシユのリーダー栄光とロデオのリーダー康利が、両軍の先頭で睨み合っている。お互いの背後には、いきり立ちながら戦闘の合図を待つ120名程のギャングが対峙していた。大通りから不意に聞こえたクラクションを合図に、一斉に怒号を上げ大乱闘が始まった。

その頃、直人は街中を歩き回り両軍のメンバーを捜していた。一向に姿が見えない事から、戦闘の開始を確信し必死になってその場所を追った。

「ちっ、アイツら何処でおっぱじめてやがるんだ……」

大乱闘も30分が経過すると、負傷者・逃亡者などの影響で両軍合わせて40名程になっていた。

「そろそろか……」

物陰に潜んでいる男が、作戦決行の連絡をし始めた。

「武蔵、本当に10名で足りるのか？」

「社長、相変わらず心配性ですね。本来なら俺1人でも十分ですよ……」

「くつくくく、頼もしいな。今後の重要な拠点だ、お前に全権を任せる!!」

亀柴商事の侵略が、今、始まるうとしていた時だった。直人は公園に到着し、両軍の真っ只中へ突っ込んで行った。

「おい、お前らちよつと待った!!」

栄光と康利は直人の存在に気がついた。

「ちよ、ちよつと直人さん。今更、何ス力？」

鼻血塗れの栄光が不満気な表情を浮かべている。

「すいませんが、もう止まりませんよ……」

冷静に康利は状況を見ていた。

行くところまで行ってしまう火がついた2人には、直人は只の邪魔者でしかなかった。周りでは怒号が飛び交っている。

「お前達の言い分は解るが、ちよつと話を聞け……」

直人は亀柴商事の存在。豊島区が拠点として狙われている事を伝えた。

「本当だとしても、今更引けないっすよ」

「何か、証拠はあるんですか？」

あまりにも推測の部分がすぎる為、それ以上、直人は何も言えなくなっていた。周囲で怒号や血しぶきが飛び散る中、無言で立ち尽くしている。すると、八方から襲いかかってくる何者かの集団が見えた。

「何だコイツらは!？」

康利は驚愕の表情で身構えている。その集団は、争っていた残りのギャングを簡単にあしらひ直人・栄光・康利を取り囲んだ。

「上等だ!!」

栄光が勇んで立ち向かうが、疲れきった体では余りにも無力だった。あっさりと伸され、その場に倒れた。

「直人さん。……こいつらの事ですか？」

「まだわかんねえが、敵なのは確かだな……」

完全に取り囲まれた直人と康利。ふと直人を見た康利は咄嗟に伏せた。直人の全身がほのかに青く光り手に狼牙棒が現れているのが見えたからだった。

「じゃー何者なのか聞いてみるか……無双・円陣乱舞!!」

直人は取り囲んでいた傭兵らしき者達を一瞬にして殲滅した。康利は立ち上がり、周りに倒れ込んでいる相手を見ている。すると、拍手をしながら1人の男が近づいて来た。

「すばらしいね、君。ぜひ俺の部下にならないか……」

完全に直人を見下しながら、ゆっくり歩いて来る男は、武蔵と名乗った。直人は頭にきている様子を見せているが、相手から漂うただならぬ雰囲気を感じていた。

「まっ、お手合わせしてみれば分かるか？」

武蔵は、腰に携えている2本の刀を抜き構えている。直人は狼牙棒で果敢に打ち合いに行くが、その攻撃は軽くないなされた。打ち合うこと10合、武蔵の渾身の一刀が狼牙棒を真つ二つに切り裂いた。

「直人さん!!」

康利は不安な表情で叫んだ。こんなに一方的に押し込まれている直人の姿を見るのは、初めてだった。

「くっそお……（まだまだ修行が足んねえな）」

「勝負あり……かな？」

武蔵は勝利を確信したのか、満面の笑みを浮かべている。

「けっ、もう勝った気でいやがる。こいつを防げたら好きにしな……」

……無双・国土!!」

直人の全身がほのかに青く光り両手にトンファーが現れた。自らが弾丸のようになって武蔵へ突っ込んで行く。凄まじいスピードから、直人を包む大気が赤く見える。武蔵は、瞬時に受けの構えで対応するが、その威力に上空へと弾き飛ばされた。

「……か、勝ったのか？」

康利は起き上がる様子がない武蔵を見て、口ずさんだ。そして、ふと直人を見ると片膝をつき蹲っていた。

「ふう……ぐっ!!」

直人は戦闘が終わり、気を抜いたと同時に体中が痛む事に気が付いた。知らぬ間に、全身の数十箇所を斬りつけられていたようだ。

しかし、何はともあれこの街を守れた事に安堵の表情を浮かべると、上空から凄まじい音が聞こえ突如ヘリコプターが姿を現した。そして、ゆっくりと着陸を始めている。

「ちつ、今度はなんだ？」

直人と康利がヘリコプターを見ていると、細身の男と厳つい男が姿を現し、こちらに向かつて来た。

「くつくくく、いやあゝ欲しい。君が欲しくなったよ！！」

細身の男が気味悪く笑いながら近づいて来る。その後ろに控えている護衛らしき男からは、只ならぬ雰囲気を感じる。直人の前で立ち止まった細身の男は、丁寧の名刺を差し出した。

「（亀柴商事 代表取締役社長）……“国取り”か！？」

「これはこれは、よおゝくご存知なようで……清と申します」

直人は差し出された名刺を見て驚いた。やはり、亀柴商事による侵略は本当だったのだ。

「武蔵相手にあんな戦闘を見させられたら……惚れちゃってもしょうがないよね？」

「それじゃー契約に移ろうか……」

清は、この場にいる全員を殺して拠点を築くか、亀柴商事の傭兵となって“国取り”の一躍を担うのか、直人に迫った。

「くつくくく、迷うことはないと思うよ」

そう言つて清は右腕を上げ合図を送った。姿こそ見えないが、公園を囲むようにそこら中から殺気を感じる。

「まっ、この男だけで十分だけどね。念には念を……」

後ろに控えている護衛らしき男の肩に手を置き、不敵な笑みを浮かべている。

「……わかった」

清は手を叩き子供のように大喜びしている。同時に園内を囲んでいた殺気が消えた。

「本気ですか、直人さん！！」

康利は悲しげな表情で直人の姿を見た。

「俺はこの街が大好きだ。しかし、今の力じゃここを守りきれない。

こうするしかないんだ……」

康利に背中を見せたまま、直人は呟いた。

「清さんよお！！俺が傭兵となるからには報酬は高くつくぜ」

「くつくつくつ、金なんぞいくらでもある」

清は更に高笑いをしている。

「とりあえず、こいつらを全員病院へ……」

直人は園内に倒れこんでいる者全てに対し、要求をした。清の合図と共に、大勢の者が姿を現し負傷者を運んでいく。その統制のとれた動きに、康利は愕然とした。

「お前を得た事は、拠点を築いた事に等しい。祝杯だっ！！……いくぞ直人」

清に肩を抱かれヘリコプターに乗り込んで行く姿を、康利は無言のまま見ている事しか出来なかった。

“傭兵” 直人の誕生である。

第35話 潜在能力 ー決意ー

――中野区：堀空道場――

――3年前に遡る。

高校最期の年、誠は入学と同時に始めた地元の空手道場で仲間と共に汗を流していた。小さな道場ではあるが地区予選を勝ち抜き、やつとの思いで掴んだ個人・団体戦での全国大会への切符。大会も1週間後に迫り、気持ちの高ぶりは最高潮を迎えていた。

「誠君、もうこの時期の稽古は程ほどにして下さいね」

誠の気持ちを察したのか、堀空師範はやさしく抑制した。この堀空師範という人物、大らかな性格で町内会会長も務めるという地域ではちよつとした有名人である。

そして、子供の頃から賢く誠実な少年であつた誠もまた、近所で評判のちよつとした有名人であつた。

そんな師範が子供の頃から見続けている誠という青年は、仲間からの信頼も非常に厚かつた。

――中野区：某所――

日が沈み始め、早めの帰宅をしている会社員の姿が見える。稽古を終えた誠は、団体戦に出場する4人の仲間と明かりが灯り始めた街灯の下を歩いていた。

色々な雑談を交わしながら歩いているが、やはり、大会の話題になると皆が熱の入った口調へと変わっていった。

そんな中、誠は自販機を見つけ飲み物を買おうと集団から離れた時だった。背後から迫るワンボックスカーが見え振り返った。目に映しだされる信じられない光景、その車は次々と仲間達をはねて電

柱に衝突した。大きな衝突音が物語るように車は大破し煙を上げている。

「……だ、大丈夫か!？」

誠は蹲っている仲間達に駆け寄った。全員意識はあるものの、呻き声を上げて苦しんでいる。すぐに衝突音を聞いた近所の住人が集まり、救急車を呼んでくれたようだ。しばらくして救急車が到着し、誠も便乗する。サイレンの鳴り響く中、皆の無事を祈りながら頭の片隅で大会の事を考えていた。

病院に到着し運ばれていく仲間達。その姿を見届け、すぐに師範に連絡をして院内のソファに腰掛けた。しばらくすると、師範が姿を現し神妙な面持ちで事故の話をしていると、仲間の父兄の姿が見え、師範と何やら話始めている。精密検査を除いて診察が終了したのか、医師が姿を現し師範や父兄と何やら話をしている。幸いにも重傷者はいなかったようだ。その後、警察の事情聴取の際に、車の運転手は即死だった事を知らされた。誠は突然の出来事に疲れた表情を浮かべている。全てを済ませ、師範に付き添われて帰宅の途についた。

——中野区：堀空道場——

翌日、学校を終えた誠は冴えない表情で道場に顔を出した。そして、ありえない光景に目を疑った。昨日、運ばれた4人の姿がそこにあつたからだ。

「お、お前ら。……大丈夫なのか？」

「鍛え方が違うんだよ……」

いたる箇所に包帯が巻かれている。仲間達の表情からは、どう見ても痩せ我慢をしていると思えなかったが、何としても大会に出場するという気迫が感じられた。

すると奥の部屋から現れた師範に、誠は呼ばれた。

「誠君、団体戦の出場を取り下げるともりなんだが……」

予想していた通りの話だった。誠は致し方ないと諦める気持ちと、それでも出場するという仲間達の強い気持ちが入り乱れていた。

「……皆の気持ちはどうなんですか？」

「何が何でも出場すると伝えて来たが……」

師範としての管理責任から、やはり出場させるべきではないと考えていた。立場的に考えれば当たり前前の判断だが、努力してきた弟子達の気持ちもどうにか酌んであげたいと悩んでいる様子が窺えた。そんな姿を見た誠は、意を決して口を開いた。

「師範、僕を全試合先鋒としてもらえないでしょうか？」

「何だつて！？ 大会のルールは知っていますよね……」

5人1組で構成され、勝ち残りで3勝したチームが勝利という変則ルール。相手との相性や強さによって、毎度戦略を考えなければ優勝できない仕組みの大会。

「僕は彼らと一緒に優勝したいんです！！」

共に汗を流し稽古に励んだ仲間達との最後の大会。出場したくてもそれが出来なくなってしまった仲間達の気持ちを痛いほど分かっている。

「だが、君は個人戦も出場するだろう。仮に優勝したとして……」

師範はトーナメント表を見ながら試合数を計算している。

「個人戦の優勝まで6戦……その後の団体戦は……」

師範が再び計算していると、稽古場から4人が入って来た。

「全てを成し遂げるには、24戦を戦うことになりますよ」

「はい、覚悟は出来ています！！」

「師範、僕達からもお願いします！！」

仲間達は誠の敗北はチームの敗北である事を理解し、戦力にはなれないが一番近くで応援したいと師範に訴えた。

「……分かりました、皆で頑張りましょう。誠君、相手は全国の強者です。くれぐれも無理をしてはいけませんよ」

「はい！！」

仲間達は残り短い大会までの時間を、治療に当て静養した。誠は皆の気持ちを一身に背負い稽古に励んだ。

第36話 潜在能力 くモンチュく

——足立区：東京武道館——

——大会当日。

開会式を終えた堀空道場の一同は、観客席に座り先に行われている高校女子の部を観戦していた。

一同は試合を見る限り、小柄な女の子が躍動感溢れる動きで勝ち進んでいく姿が印象に残っていた。そして、決勝戦にその子が姿を現すと、応援団なのであるうか熱烈な叫び声が館内に響き渡った。

「香織！！ 頑張れえーえー！！」

おそらく師範と思われる男性の、ひときわ目立つ応援。声は裏返えり、もはや奇声に変わっている。香織は恥ずかしそうに顔を赤らめていた。

「……（まったくお父さんったら、恥ずかしいからやめてよ……）」
試合開始を告げる声と共に、相手に突進していく香織。決勝まで力を温存していたのであろうか、まるでスピードが違っていた。相手は躍動感溢れるその動きについていけず、あっさりと試合は終わってしまった。

会場の観客には桁違いの香織の強さより、師範と思われる男性のひときわ目立つ応援が、印象に残るような決勝戦だった。

仲間達が、香織を絶賛する会話をしている中、誠は無言のまま、香織を見続け何かを感じていた。

「次はお前の出番だな。個人戦、頑張れよ！！」

興奮冷めやらぬ試合会場を無言で見続けている誠の肩を、仲間達は軽く叩き勇気付けた。

「ありがとう。……先ずは初戦が大事！！」

誠は立ち上がり両手で頬を叩き気合を入れ、試合会場へと向かつ

て行った。

しばらくして個人戦が始る。初戦こそ緊張からか肩で息をして動きは硬かったが、誠の強さはずば抜けていた。皆の心配を他所に、あっさりと優勝してしまった。

その強さが目立ったのか、会場の大勢から祝福されている。手を振り頭を下げて挨拶し、仲間達の元へ向かった。

「優勝、おめでとう!!」

選手の控え室としても利用されている通路で、堀空師範を先頭に仲間達に祝福されている。すると、背の低い細身の老人が誠達の元へ歩み寄って来た。誠の目には、70歳前後に見える老人。その後ろには、香織、師範と思われる男性、そして、おそらく小学生と思われる男の子が立っていた。

老人に気づいた堀空師範は、深々と頭を下げた挨拶をしている。

「これはどうも、音郷さん。ご無沙汰しております」

何やら老人と面識があるようだ。それを見た誠と仲間達も、老人に深々と頭を下げた挨拶をした。

「その青年、よく目を見せておくれ……」

誠を見て老人は手招きをしている。不思議に思った誠だが、老人に歩み寄りかがんで顔を近づけた。

「……（潜在能力を引き出してやろうかの）」

すると老人は、目にも留まらぬ速さで誠の眉間に軽い一撃を加えた。周囲を含め、本人ですら何をされたのか分からなかった。誠は老人と向き合いながら、その背後から送られる香織の視線を感じていた。

誠は体を起こし香織を見つめている。誠と香織が初めて出会った瞬間だった。すると、アナウンスが聞こえ団体戦の出場者が呼ばれている。

「師範、それでは行ってきます!!」

誠は仲間と共に師範に挨拶をして、集合場所へと向かって行った。その弟子達の姿を、師範は笑顔で見送っている。

誠達の姿が見えなくなつてすぐの事だった、大会関係者が音郷師範の元へやって来た。とても大慌てしている様子だ。小学生の男の子は、何やら笑いを堪えている。

「ちよつと、ちよつと音郷さん。もう勘弁して下さいよ!!」

「えつ? 何の事ですか……」

関係者に対して、音郷師範はすつとぼけた顔をしている、香織は咄嗟に背を向けた。

「娘さん……中学生ですよね?」

高校生の大会に中学生が出場した違反を告げる関係者。音郷師範は出場規定年齢より、下なんだから大丈夫だと自分勝手に反論している。案の定、大会規定により香織の失格、優勝取り下げ処分となった。

「もう、音郷さんの所だから今回は大目に見ますけど……… 今後は本当に勘弁して下さいよ」

「ひえっひえっひえっ」

老人は関係者を見て笑っていた。老人に一礼した関係者は、優勝トロフィーを受け取り、そそくさと大会本部へ帰って行った。

「ほらあゝやつぱりばれたでしょ、お父さん」

香織は軽蔑の目で父親を見た。音郷師範は、修行の一環だと苦し紛れの言い訳をして、あたふたしている。その姿を、小学生の男の子は楽しそうに眺めていた。そんな2人を他所に、老人は堀空師範に尋ねた。

「堀空君、あの青年を音郷に預けんか?」

あまりに唐突な話に、香織と音郷師範は目を見開き老人を振り向いた。

「私も、そうお願いしたいと思っております」

これ以上、誠に教える事が無い事を師範は痛感していた。又それ以上に、彼に何かを感じていた。

「あの青年にはな……【モンチュ】の潜在を感じるんじゃない」

「モンチュ」 古代エジプトの戦神。

「能力」 戦闘の天才。見た目に変化は伴わないが、いかなる戦闘にも対応出来る器用さを兼ね備える。

「モンチュと申されますと…… 戦闘の天才と崇められているエジプト神の事ですか？」

「ふむ、彼はこの国にとって必要な人物に成り得るはずじゃ……」

堀空師範は何かを感じてはいたが、それ程までと驚いている。小学生の男の子もまた、初対面の誠に何かを感じていた。

「この子にとっても良い刺激となるじやろう」

そう言いながら、香織のお尻を撫でている。

「あつ、こらっ…… お爺ちゃん!!」

怒った香織に追いかけている老人。その追いかけてこを見ている小学生の男の子は、声を出して笑っていた。

そんな時、会場から大きな歓声上がるのが聞こえた。誠は、見事先鋒として全ての試合を勝ち抜き優勝を果たしたようだ。個人・団体戦のW優勝に加え、1人で全戦全勝。前代未聞の快挙を成し遂げた。

その夜に行なわれた祝賀会で、誠は師範から老人の話を聞かされた。今まで育ててくれた師範に深々と頭を下げて感謝を述べ、音郷道場にお世話になる決意をしたのだった。

第37話 皆殺伝説 〱大工の魂〱

――目黒区：碑天建設――

夏の盛りが過ぎたとはいえ、残暑厳しいこの季節。昼食を終えた弟子達は、会社の4階にある応接室から道路を見下ろして暇を持て余していた。日傘をさして歩いている人の姿などを眺めながら溜め息をついている。では頭領の信人はというと、弟子達の不安を他所に応接室のソファで一升瓶を片手に歌っていた。

「大工一筋37年〱 バール持たせりや天下一品〱 人情・心情当たり前〱 それが俺達大工の魂〱。はあ〱……仕事がねえ……うい」

この業界に限らず、大不況の大波が全国をのみこんでいた時代。

中小零細企業は行き場を失い、大企業でさえリストラ無しでは生き残れない状況下に陥っている。そして、国そのものが疲弊しきっていた。そんな失望感溢れる時代に、一筋の光を照らし続ける亀柴商事が人心を引きつけていた。

「……寝ちゃったよ。伝説の大工も仕事がなくっちゃなあ」

ソファ一に歩み寄り気持ちよさそうに寝ている信人の寝顔を、弟子達は囲むようにして見ていた。そして、働き所を失い途方に暮れていると来客のベルが鳴った。

「こんにちは。信さんいます？」

「あつ、仁さん。こんにちは、どうぞ……」

仁は、弟子達に案内され応接室に入ると大きないびきが聞こえてきた。ソファ一に向かい、信人の気持ちよさそうな寝顔を見ている。

「あーあー、この人は昼間っから……」

弟子達が不安そうな表情をしていた理由が分かった気がしていた。そして、弟子達に振り向き、一時的だがヒートで活躍の場を与える

と誘っている。

「お前ら体が鈍るのが嫌なら、運動しに杉並区に来いよ。……昼寝に邪魔だし、起こすのも気が引けるから帰るな」

仁は、起きたらよろしく伝えておいてくれと言い残して帰った。

ここ最近、めっきりと仕事が無い弟子達は、仁の誘いに甘えようか、いやしかし危険が隣り合わせだなどと盛り上がっている。

「そーいやー仁さんって『百式』の使い手なんだよな？」

「あつ俺、見た事あるぜー！！ 目茶苦茶強えーよ」

「ああ、あの神速の蹴はヤバイね」

暇を持て余し、血気盛んな弟子達の会話は終わらない。

「でもまあ、ここだけの話だぞ……仁さんって負けた事あるんだって」

一瞬、場が凍りついた。

「……で、誰にだよ？」

「まさか……この人にじゃねーよな？」

「あははは、ま、まさか……こんな飲兵衛なんか……うわあ！！」
すっかり泥酔していると思いこんでいた弟子達の背後で、飛び出さんばかりの目を見開いて仁王立ちしている信人の姿があった。

「……飲兵衛で悪うござんしたね……うい」

拳骨をチラつかせる信人に、弟子達は平謝りしている。

「冗談だよ。お前ら……興味があるのか？」

一斉に目を輝かせてうなずく弟子達の表情に、親心なのか若さへの嫉妬なのか少し羨ましく感じていた。

「仁が負けた相手ってのは、“皆殺”の『翔』だ！！」

一同が口を空け、啞然としている。しかしある者は、何かに疑問をもった表情をしていた。しばらくして、ざわつき始める弟子達。

「でも、……仁さんと『翔』は友人じゃないんですか？」

「ああ、そうらしいな。今はな……」

信人は仁から聞いた話であり、又、仁も『翔』の親友の『昌也』から聞いた話になる事を弟子達に伝え、語り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860y/>

悪がまに ~ 23区編 ~

2011年12月17日12時53分発行